
魔法少女リリカルなのは - 混沌の賢人 -

死食經典義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは - 混沌の賢人 -

【Nコード】

N1840L

【作者名】

死食経典義

【あらすじ】

混沌なる賢者の石、その名を持ち、永久のときを生きる者がいた死ぬことは許されず、世界を見続けて行く

彼が織り成す物語は世界に何をもたらし、紡いでいくのだろうか

プロローグ01（前書き）

死食經典義「はい、やってしまいました。魔法少女リリカルなのは
S t r i k e r S } T H E C R U S H E R } がまだ全然進んでな
いのに新規投稿開始！！待てと言われてももう止まりません。こ
んな自分の作品ですがよければ読んで下さい」

プロローグ 01

遙かなる昔、現代の人々がアルハザードと呼ぶ世界があった

はじまりの王により統治が行われたその世界は安定と平和がもたらされていたが、裏で蠢く者は少なからず存在していた

その物達は殆どが行動を起こす前に始末されていたが、その手を逃れた者達が今、1つの実験を行おうとしていた

「首領、準備が完了いたしました」

「ご苦労だった。では、早速始めるとしようか」

「了解いたしました」

「くつくつく・・・この実験が成功すれば、はじまりの王など取るに足らん！！さあ、我らが覇道の始まりだっ！！！！」

同時刻 地下闘技場

ここは先ほどの首領が隠し持つ地下闘技場。今此処には彼らが各地から密かに買い集めた奴隷、666人が集められていた

「おい、666号」

丸眼鏡をかけた10歳くらいの少年が一人の男性を呼びながら走っていた

その声に反応したのは白銀の髪を無造作に伸ばした20前後の青年。道を歩けば女性は十中八九振り返るほどの美形だが、如何せん目付きの悪い

「んあ、何だ534号か」

「何だはないつしよ、僕達は友達だろ」

「259号みたいな美人に話しかけられるのと一緒にいてもむさ苦しいだけの男、どっちを取るかは言わんでもわかるだろうが」

彼らには名前がない。赤子の時に売られたり、記憶を消されたりしている為だ

「あら、褒めても何もでないわよ？出せても一晩一緒にいるくらいよ」

「ん、いたのか259号。俺はそれでもいいぜ」

彼らの元に現れたのは、背の半ばまで伸びる美しい緑色の髪を持つ美女。モデル顔負けのスタイルを持ち、奴隷内ではアイドル的な存在だ

「ふふ。相変わらずね、あなたは」

「褒め言葉として受け取っておくぜ」

今此処に集まった259号、534号、666号。この3人は馬が合う為、よく一緒に行動している

「それにしてもよ、いったい何なんだ？ここにいる奴等を全員集めて何する気なんだか」

「殺し合いじゃなかったら、僕はいいけど」

「あら、殺し合いでもいいじゃない。666号と一緒にいれば間違はなく生き残れるんだから」

「殺し合いなら任せておけ。お前ら以外皆殺しにしてやるからよ」

「あはははは・・・」

「期待してるわよ、666号」

そこへ、彼らを集めた張本人がやってきた

闘技場を一望できる高台から彼らを一瞥し張本人、首領を呼ばれていた男は言い放った

『諸君、今日集まってもらったのは他でもない。君達を解放するためだ』

魔法を使い増幅された声が闘技場内に響いた

そしてその内容に奴隷達はざわめいた。此処から出れると喜ぶ者、出ても楽が出来るわけじゃないと罵倒する者

首領はそのざわめきがいったん落ち着くのを待ち、さらにこう言い放った

『ただし無条件に出れるわけではない。今から行つ実験に耐えることのできた者を開放する』

その一言で再度闘技場内はざわめいた

「実験つてなんだろうね？出れるのは嬉しいけど」

「さーな。どうせ碌なもんじゃねーのは確かだ」

「どんな実験かしらね。ま、私は耐え切つて此処から出させてもらうけどね」

『なお、君達には拒否権は一切存在しない。ではコレより実験を開始する！！』

そつといい残し、首領は高台から姿を消した

「転送魔法で移動したみたいね」

「直ぐにいなくなるってことはさ」

「やばい実験かもな。ま、お前らは出来る限り俺から離れるなよ。その方があんぜ・・・・・・・・なんだ！！??？」

突如として地面が光りだし、その光は闘技場の壁を走るように広がっていく

その光景に奴隷達は声を失っていた。その光が黒い光りだったためだ

自然にはない光に、見惚れる者、恐怖する者。その場にいた全員が声を出すことを忘れている

そしてその黒い光は壁から離れさまざまな方向へと進んでいく

その光景を上空から見ていた者がいれば、円状の闘技場に黒い光で正五角形と五紡星の魔方阵が描かれていくのが見れただろう

だが、奴隷である彼らにそれを知る術はない。そしてそれがもたらす結果も・・・

魔方阵が完成し、闘技場を黒い光が包み込んだ

「くっ・・・」

余りの黒い眩しさに666号は眼を腕で隠した

そして光が収まり、666号は腕を下ろし辺りを見渡した

「何だっただんだいたい・・・っ!？」

彼の目に飛び込んできたのは地面に倒れている同じ奴隷達の姿だった

「いったいどうなったてんだ。そだ259号と534号は、二人とも無事か!」

自分の後ろにいた筈の二人に声をかけるが反応が帰ってこない

後ろを振り向くと周りの奴隷達と同じように二人とも倒れていた

「ちっ！二人とも起きろ！！」

666号は二人を揺するが起きる気配が、いや生きている人間の気配がなくなっていた

「おい、マジかよ！？」

慌てて二人の心臓に手を当てるが、その心臓は動いていなかった

「・・・前からの約束だったからな。259号お前のその髪、形見として貰っていくぜ」

666号は靴のそこに隠し持っていた折りたたみナイフを取り出し、259号の髪を切り取った

そしてその髪をミサンガのように編みこみ、自身の髪を纏める紐にした

666号は暫く259号と534号を見下ろし感慨耽っていたが、足音が聞こえたため見ることをやめてその音の方向に振り向いた

振り向いた先には首領とその部下数人がこちらを見ていた

「ほう、実験は無事成功したようだな」

「そのようです首領。コレで更なる力を手に入れることが可能となりました」

「手はを整えて置けよ。いつ王の手先が来るかわからんからな」

「直ぐに取り掛かります」

666号はその会話が理解できていなかった

「おい、どういふことか説明はしてくれるんだろうな」

「んゝ貴様などに話しても理解できんだろうが、まあいい話してやるう。今回行ったのは賢者の石の精製だ」

汚物を見るように一瞥したが、機嫌が良かったのか首領はそのまま話し出した

「賢者の石の精製・・・」

「賢者の石は知っているかな。魔法生物や人間が持つリンカーコアを特殊な魔法を使用し外部に露出、そして物質化させ魔力の塊とした物が賢者の石だ。凶悪な生物や犯罪者の無力化の為に行使され、出来た石は医療や魔力の外部ブーストとして使われているのだよ」

「それで？」

「普通ならば一対象に対して行うのだが、生成魔法を拡大し魔方陣にいる者を全てを1つの石にすることが可能となった」

「で、その石はどこにあるんだよ？」

「石は貴様の体だ」

「なに？」

「生きた人間を石の材料とし、その石を生きた人間に内包する。これが今回の実験の目的なのだよ」

⌈
•
•
•
•
•
•
⌋

「実験は見事に成功した！！石となつた貴様は無尽蔵の魔力、そして自動的に修復する不老不死の体！！！！そして貴様は、我らがその力を持つための試作品よ！！！！」

「・・・それで俺は此処から出れるんだろうな」

[illegible]

666号は後ろを向き259号と534号を再度見下ろした

首領はそれを見て

「なんだ、そいつらがお気に入りだったのか？ 気にすることはない、いつかは死ぬ命を我らのために使えたのだ」

その言葉に666号の肩がピクリと動いた

「その女に惚れていたのか？貴様が望むならその女をクローンし貴様に与えてやろう。せめてもの褒美と思え。くあははははははははははは！！！！！」

その声は666号には聞こえていなかった

「259号、534号・・・墓は立てれないけどよ、安らかに眠ってくれや。お前達のところはこの実験をした馬鹿どもを送るからよ、そっちで好きに料理してくれ・・・」

二人に黙祷を捧げ、首領に振り向いた

「貴様、先ほどはをぶつぶつ言っていた」

「ああ、貴様らをあの世に送るから、ボコボコにしてくれてこいつらに挨拶してたんだよ」

「ふ、面白いことをいう。貴様にそんなことが出来るとでも？」

「出来るに決まってるだろうが、阿呆」

「なにっ!!」

「てめえがさっき言ったんだぜ。無尽蔵の魔力があるってよお」

666号の周りを首領の部下達が取り囲む

「いくら魔力があろうとも、魔法の使い方を知らなければ意味がないだろう、笑わせるな」

「ああ、俺は魔法は使えない。だけどな・・・」

「だけど、なんだというのだ」

「ただ魔力を開放するくらいなら俺にもできるだろ」

「なつ・・・！！お前達！！早くあいつを捕らえろ！！！」

「遅いんだよぉ！！！」

666号の体を中心に魔力が放たれた。放たれた魔力は闘技場を包み込むドームとなるまで広がった

一切調整が出来ず最大出力で放たれた魔力は闘技場を一瞬で消し飛ばした

魔力が収まった後には更地しか残っていなかった。

259号や534号、他の奴隷達。そして首領やその部下の姿はない。魔力による破壊で塵すら残さずに消し飛んだのだ

その更地に佇むのは666号ただ一人

666号は自身の魔力で雲が吹き飛ばされた、蒼く澄み渡る空を見上げ呟いた

「俺だけが生き残っても、つまんねーんだよ・・・・俺もそっちに行きたかったぜ、259号、534号・・・・」

その表情、その瞳はただ青く澄み渡る広大な空だけが映っていた

プロローグ01（後書き）

死食経典義「物語の始まりは、なんとアルハザードのある時代です
！！」

666号「おいクソ作者」

死「口が悪いぞ、おまえ・・・」

666号「知るかななこと。それよりも、アルハザードから始つて
大丈夫なのか？ちゃんとリリなの本編に入れるんだろうな、あゝ！
！」

死「プロローグは3 4回で終わるから、その後リリなの無印に入る
予定です」

666号「あとよお、俺の名前はどーすんだ？このまま666号な
訳ねーよなあ」

死「無論ちゃんと考えてあるから安心しろ」

666号「ならばよし」

死「では皆様、新しく始つた『魔法少女リリカルなのは - 混沌の賢
人 - 』を宜しくお願いします」

666号「気が向いたら感想や叱咤激励、批評とかくれや。待つて
るからよ」

死「ではまた次回」

芥「俺のこと忘れてないよな？」

死「安心しろ、ちゃんとやってるから」

666号「更新忘れたら跡形もなく消し飛ばすから安心しとけや」

ブログ02（前書き）

死食經典義「自分でも驚く速度で更新です！」

666号「そーなのか？」

死「おう、自分で自分に吃驚してるよw」

666号「そーかいそーかい」

ブローグ02

666号の魔力開放で更地となった闘技場跡。今そこに一人の男が降り立った

短く切りそろえた黒髪に強い意志を宿した黒瞳、モデルのようなスリムな体形を軽鎧で包みこんだ女性的な顔立ちの20代前半から半ばぐらいの男だ

「どうやら、間に合わなかったみたいだね」

その男は周囲を見渡しながら呟いた

「今回はあちらさんに一枚取られたかな。仕方ない一応生存者を探さない」と

しかし、周囲は完全な更地。生存者の存在は皆無といってもいいだろう

「生存者はいないか・・・ん、アレは？」

更地の中央、そこに何かがあることに、その男は気がついた

確認のために近づいてみると、それは地面に横たわる人間、666号であった

「おい、君。大丈夫か！？」

「あー？誰だ、てめーは」

666号は横になった姿勢を直さないまま答えた

「私はここにいたはずの科学者の集団を取り締まるために来たんだ。ソレよりも君のほかに生存者はいないか知らないかな」

「科学者・・・あーあのクソ野郎どものことか。あいつ等なら俺が完全に消し飛ばした。で、俺以外の奴隷仲間はこちらにいるらしい」

666号は自身の胸を指差し言った

「いったいどうゆうことか説明をお願いできるかな？」

「いいだろう、俺自身整理をしたいからな。クソ野郎が話したことでもいいんなら話すぜ」

「頼むよ」

そして666号は話し始めた。奴隷仲間のこと、ここにいた理由、首領と呼ばれていた科学者が話したこと、そして此处が更地になっ
てしまったこと

（なんだろうな、コイツとは初対面な筈なのによぉ・・・なんでこんなにベラベラ俺は話してるんだ？）

666号はここまで饒舌に話すことはない。いつもなら必要最低限の話をして、それで終わり。しかし、今彼は初対面の男に自分の仲間だった者たちのことまで話をしている

（こうして、話をするのも悪くないかもな）

666号の瞳は生き生きとしていた。舌が乾くことも忘れ話し続けた。そして男は一切質問をせず、666号の話を聞き続けた

「つて、訳で俺は賢者の石とかゆーのになっちまったみたいだ」

666号がそういい、話を括った

「なるほどね。彼らが行っていたのはその研究だったんだ」

「おいおい・・・取締りに来たんだろ？ソレくらい調べておくもんじゃねえのかよ」

「手厳しいね。今回は彼らの情報がまったく入ってこなかったから。今回でさえ、人体実験を行おうとしているってくらいしか情報は来てなかったんだよ」

「そーゆーことにしておくか」

「ははは・・・」

666号はいつもの調子を取り戻していた。259号や534号の達のことから立ち直ったわけではない。彼の前にいる男の影響だろう、彼が素のままではいられないのは

「ところでよ、俺はこれからどうすりゃいいんだ？」

「そうだね・・・一応私に同行してもらえるかな？君がいつたいど

うなっているのかを調べないといけないから」

「ああ、わかった・・・ソレともう1つ」

「なんだい？言ってみて」

「お前をなんて呼べばいい？俺はお前の名前を知らんぞ」

すると、男はきよとんとした顔になり、直後に笑顔を浮かべた

「ごめん自己紹介がまだだったね。私のことはアルって呼んでくれるかな」

「アルだな。俺は666号だ」

「・・・随分変わった名前だね？」

「クソ野郎どもが呼んでいた番号だよ。此処に来る前の記憶は消されててな、自分の名前すら思いだせん」

「あ、ごめん」

「気にするな。適当に呼んでかまわん」

「君の名前はおいおい考えていこうか。それじゃ、此処から移動するから横に来てくれるかな」

666号は立ち上がって、アルの横に移動した。

「それじゃいくよ」

「行くって……どこにどうやって行くんだよ？」

「何処かは行ってみれば分かるよ。どうやっては、こつやってね」

地面に魔方阵が浮かび上がり666号とアルを照らし出した

「これは？」

「転移魔法だよ、コレがあれば遠くにも直ぐに行くことが出来るんだ」

「……便利だな、機会があったら教えてくれや」

「いいよ、教えてあげる。じゃ、いくよ。転移！」

666号とアルの姿がその場から消えた。その場には何も大地と蒼く澄み渡った空だけが残った

[illegible]

転送が終わり二人が着いた場所は、巨大な建造物の前だった。

「さて、ついたよ」

アルが声をかけるが、666号からは反応がない。いや、反応できないと言ったほうが正しいか

「おい、アル・・・」

「なに？」

「俺の残っている記憶に間違いがなければだよ、ここって、王宮じゃねえのか？」

そう二人の前にある巨大な建造物。それは始まりの国の王宮なのだ

アルハザード

「あれ、言ってなかった？」

「言ってねえよ!？」

「今気がついたからいいでしょ？ソレよりも中に入るよ」

「お、おい。引つ張るな。自分で歩ける!」

アルは666号の手を引き、王宮の中へと入っていった

中に入り、666号はその豪華さに唖然とした

「すげえ・・・」

「ふふ、いくち此処はいろいろな人が来るからね、多少は派手にしておか

ないといけないんだってさ」

アルが666号に説明をしていると、そこに一人の壮年の男がやってきた

「王！ご無事でしたか！？」

「あ、グレン。今戻ったよ」

「なあ・・・今、王って言ってたよなあ・・・王って、始まりの王・アルハザードじゃないと思うんだがよ」

「うん、私だよ？言ってなかった？」

「初耳だあああ！！」

壮年の男は二人の前に来るとアルに対し小言ともとれる説教を始めた

「いくら我らより強いからといって、単独行動をしてもらっては困ります！あなたは我らの王なのですから、もう少し自覚を持っていただきたい・・・ところで、王。その者は？」

グレンと呼ばれた壮年の男は666号を訝しげに見た。その目が気に入らなかったのか666号はグレンを睨んだ

「彼は、あの科学者達の事件の生き残りなんだ」

「生き残り・・・では他に生存者は・・・」

「残念だけど・・・」

「そうですか・・・一人でも無事に救出できて何よりです」

「・・・それが無事じゃなさそうなんだ。詳しいことは彼の検査をしながら話すよ」

「分かりました。では検査室へ参りましょう」

グレンを先頭に3人で検査室へと向かう

「ときに、少年。我輩はグレン・フレイヤと言う。お主の名前は？」

不意にグレンが666号に訊ねた

「名前はねえよ。呼びたけりや666号でも何でも好きに呼んでくれや」

不機嫌を隠そうともせず666号は答えた。答えたくても答えられる名前がない。ずっと666号と呼ばれてきた彼にとって、ソレが名前に等しかった。しかしソレは名前のようではあるがあくまでも番号。正真正銘の名前がないということに、彼は苛立ちを覚えていた

「彼は記憶を消されちゃってるみたいでね、名前がない状態なんだ」

「そうでしたか。すまなかった、少年」

誤られるとは思っていなかったのか、666号は慌てて言った

「いや、俺こそすまねえ。あんたに当たっても意味ないのによ」

「ふふ、後で名前考えようね」

「ああ」

そこで話は途切れ、3人はただ検査室に向かって歩き続けた

「到着しました」

グレンが検査室の扉を開け、アルと666号を中に招いた

「検査室って言うてたから、なにか機材でもゴロゴロしてんのかと思っただけが・・・魔方阵だけかよ？」

検査室の床と壁には魔方阵が描かれている以外、他に何もなかった
「必要なのはこの魔方阵で調べられるからね。それじゃ、早速調べようか」

「王。その前に変身魔法を解除してください。検査魔法の妨害になる可能性がありますゆえ」

「・・・変身魔法？」

「あ、今解くね」

アルの頭の上に光の輪が浮かび上がり、その輪はだんだんと下へと下がっていく

光の輪が下がりきったとき、そこには先ほどまでの男のアルではなく、短かった髪は腰まで伸び、軽鎧は控えめな装飾ではあるが美しい白いドレスとなり、そのドレスを見事に着こなす美女が立っていた

「んーやつぱりさ、ドレスは動きにくいよ」

「・・・・・・・・女？」

「あれ？言ってなかった？」

「言ってねえよ！？今見て言葉も出てこねえよ！！」

「言葉は出てるよ？」

「そーゆー意味じゃねええ！！」

そんな666号の肩にグレンが手を置いた

「少年・・・王はこういう方なのだ・・・・・・・・」

「・・・今の一言で、あんたの苦勞が分かった気がするぜ・・・・・・・・」
「」

「それじゃ、早く検査しちやおうか」

二人を置いて検査のために魔方阵を起動するアル

「少年、いろいろ言いたいこともあるだろうが、とりあえず検査を済ませてしまわないか」

「同感だ・・・」

プロローグ02（後書き）

死食経典義「ってことで、アルハザードの王様が出てきちゃいました」

666号「おい、コレは・・・」

死「はい、完全に自己分析&自己解釈でのアルハザード王です。王としての力もあり、天真爛漫な女性でもあるように出来たか不安は残るけどね」

666号「まー俺にはあんまり関係ねえな」

死「（実は関係大有りなんだよねえ）」

666号「なにかいったか？」

死「うんや、何にも言ってないよ」

666号「そうか。ところでよお、いつまでプロローグを続ける気だ、ああ！？」

死「あ、あと23話は続くかもしれないです・・・」

666号「ならとつとと終わらせて、本編に入れるようにしろや、ダボが！！」

死「ひいっ！？俺の命がピンチばくなってきたので、今回は此处で失礼させていただきますー。また次回お会いしましよー！！！！」

プロローグ03（前書き）

死食経典義「またプロローグです」

666号「いつまで続くんだよ、このプロローグってのはよ」

死「あと2、3話くらい？」

666号「とつとと本編入れや」

ブローグ03

検査室の中では、666号の検査が行われていた

検査と言っても、体中にコードを付ける様な検査ではなく、ただ魔方陣の中に入るだけのものであるが

「おい、まだ終わんねの？」

ただ魔方陣の中に入るだけなので、検査される側は何もすることがなく暇になる。その場にただ立つだけというのは思いのほか疲れるものなのだ

「もうちょっとかな。もうちょっと我慢してて」

「あいよ」

アルは入り口側の壁に描かれている魔法陣を厳しい表情で見ながら666号に返答していた

その魔方陣には、666号が立っている魔方陣から得られた666号の情報が表示されている

魔力レベルや希少技能の有無、魔法器具ならばどのような用途が可能かまでを調べ表示するのがこの検査用魔方陣である

通常であれば3〜5分程度で終わるのだが、666号の検査は既に10分以上かかっていた。つまりはそれだけの情報が彼の中にあるということなのだ

だが、そんなことを666号は全く知らないし知る由もなかった。
アルが話し忘れているのだから仕方がないが

先ほどの会話からさらに10分程たち、666号の検査が終了した

「あー、ただ立ってるだけってのは辛かったぜえ・・・」

「いや、申し訳ない、少年。此処まで時間がかかるとは思っていなかったのだな」

666号の愚痴に苦笑をしながらグレンが答えた

「あー気にしないでくれや。ソレよりもだ、検査結果は教えてくれるんだろ？」

未だに情報が表示されている魔方陣を見ているアルに666号は問いかけた

アルは振り向いたが、その表情はいささか厳しいものだった

「おいおい、いったいどーしたつーんだよ？そんな怖い顔してよ」

「・・・そうだね。君にこんな顔見せても仕方ないもんね」

アルはその表情を微笑みにかえて、言葉を続けた

「まず、君の体。コレは何処も異常はないよ、いたって普通。でも、体の内部、内部って言うても内蔵とかじゃないよ？」

「んなこたわかってるつーの・・・」

「魔力体っていうんだけど、その魔力体にあの実験のせいで石が融合しちゃってる状態になってる」

「石って賢者の石か？」

科学者達が話していた内容を思い出し、666号はソレが賢者の石ということに気がついた

「うん、でもね。通常賢者の石は1つの魔力コア分しか収容できない。ソレを術式をいじる事で無理矢理664個もの魔力体を圧縮して入れたんだろーね。君の中にある石からは想像も出来ないほどの魔力が検出されたよ」

「・・・ちと待ってくれ」

「何か質問？」

「質問つーよりも、疑問だな。あの場所で実験と一緒に受けたのは、俺を含めて666人だったんだが、今のアルは664人って言うてたんだよ」

そう、あの実験を行った闘技場には科学者達を抜かして666人の人間がいた。だが、666号の魔力体に融合している石には664人分だという。コレはいったいどういうことなのだろうか

「その説明をするね。まず、君が受け皿になっているから君の魔力体はカウントされないんだ。イメージするなら、お茶碗の中にご飯が入っている状態」

「・・・分かりやすいが、その表現はどうかと思うぞ」

「そして、その圧縮生成された石の表面を常時動いている魔力体があるんだ。どうしてかは分からないけどね」

「なるほど・・・それで664人分ってことか」

「うん。そしてこのままだと君は不完全でいずれ消滅することも分かったんだ」

「・・・はあ!?!」

いきなり自分が消滅すると言われても早々に理解は出来ないだろう

アルは666号の反応を気にしないで話を続ける

「君の石を作るのに使われた魔法は666の魔力体を1つに圧縮するはずだったらしいけど、君が受け皿となったことで圧縮結合されたのが665個になっちゃったんだ。そのせいで石の中の魔力体の結合が不安定になってるんだ。その不安定な状態を抑えているのがさっき話した動いている魔力体なんだよ」

「えっと・・・つまりどうすりゃいいんだ?」

「外部から魔力体を補完しなくちゃいけないかな。そのままといつか暴走すると思う。君の魔力はとてつもない量があるから、1星系は吹き飛ばせると思う」

「おいおい、マジですか・・・」

「うん、マジ」

666号は自分をこんな風にした科学者達を、頭の中で10回ほど殺した。そんなことをしても意味はないのだが

「で、俺はどうやってその、補完だったかをすればいいんだ？賢者の石を飲み込めばいいのか？」

「それがね・・・」

アルは、そこで言葉を詰まらせる。その表情は多少曇っている

「どうした、教えてくれや」

「君の石は魔力体の集合って、さっき話したよね。この魔力体は言いかえれば魂なんだ。他者から魂を貰うって言うことになるんだ・・・」

「・・・誰かが死ぬってことが、ソレは」

「・・・・・・うん」

部屋に沈黙が訪れる。

不完全なままではいずれその魔力が暴走し星系が1つ消える。補完をすると人と人が最低でも2人死ぬ

二者択一。どちらをとってもあまり気分のいいものではない

「王、少し宜しいでしょうか」

アルと666号の会話に入らず、ただ聞いていたグレンがアルに話しかけた

「その暴走は直ぐ起こるのでしょうか？」

「ううん。おとなしくしていれば問題はないと思う。でも、一回でも死んじゃうと暴走する可能性はすごく高いかな」

「他の魔法生物では代用は利かないのでしょうか？」

「残念ながら・・・」

グレンはそこでいったん言葉を切り、何かを思考し始めた。暫くし、彼は言い放った

「ならば、我輩がその補完の1つになりましょう」

「「ええっ!？」」

「無論今すぐという訳ではありません。我輩が死ぬ直前、そのタイミングであればなんの問題もないかと思っています」

「死ぬ直前か・・・それは思いつかなかったよ」

「死ぬ直前ならば、良心の呵責にもさほどなりませんまい。いかがかな、少年」

「おっさんがソレでいいってゆーんなら、別にいいが・・・本当に

いいのかよ？」

「なに、どのみち後十数年の命よ。ならば死ぬ間際まで何かの役に立ちたいのだよ」

そういうグレンの目には決意が見えていた。その決意を否定することとはグレンを否定するのと同じともいえるくらいに

「王、宜しいですか？」

「もう決めちゃったんでしょ。私は何も言わないよ」

「申し訳ない」

「心の優しいというか、人が言いと言うか・・・俺は礼を言うことしかできんぞ」

「ふっ、礼などいらん。これからは少年、お前に王を守って貰うのだから」

突如言われたその言葉に666号は目を丸くした

「・・・どゆこと？」

「我輩の命を渡す代わりに、王を守り続けてもらいたい。なに、稽古ならきちんとつけてやるから安心しろ」

「俺に拒否権は？」

「ないと思うよ。グレンは一度決めたら曲がないから」

「は、ははは・・・」

「頼んだぞ少年。では稽古の準備をしてまいります」

そういつてグレンは部屋から出て行った

此処に契約は成った。ただし一方的で拒否権などなかったが

グレンが退室

「取り合えず、検査した結果はこんなところかな」

「いろいろと言いたいところはあつたがな・・・」

深くため息を吐きながら、666号は言った

すると突然、アルは両手を打ち合わせた

「そうだ、君の名前決めないと！いつまでも君のままだと困るだろうし」

「あー、考えるの面倒だ。任せるわ」

だが、アルは既に思考を開始していたため、666号の言葉は聞こえていなかった

「・・・変な名前じゃなきゃいいんだが・・・」

666号はそういいながら検査室に横になった

それから5分ほど時間がたったくらいに、アルは再度手を打ち合わせた

「うん、決めた！」

「お。決まったか。変なのじゃないのをお願いするぞ」

「任せて、自信あるから」

満面の笑みをアルは浮かべている

見方によつてはイタズラを思いついた笑顔にも見えなくはないが

「で、どんななんだ」

内心不安になりながらの666号は尋ねた

「ワイズ。ワイズ・カオストーンって言うのはどう？」

「ワイズ・カオストーン、か・・・意味はあるのか？」

「うん、ワイズは賢人って意味なんだよ。賢者の石の賢者から取ったんだ。カオストーンは、カオスとストーンの組み合わせ。それで賢人の混沌石って意味にしてみた」

「賢人の混沌石、ワイズ・カオストーンか・・・・・・・・これまた俺に似合わないご立派な名前なこと」

666号は苦笑を浮かべている。賢人なんて立派なものでもないの

に、といったところだろうか

「これから長いときを生きることになるんだろっからさ。いつかは名前負けしないときがきると思うよ」

「そうかねえ」

「そうだよ」

互いに笑顔を浮かべ、二人は話している。新しい名前を喜び合っているのだ

「さて、改めてと言うのも変だが。ワイズ・カオストーンだ。これから宜しく頼む、アルハザード王」

「アルでいいよ。宜しくねワイズ」

この瞬間から666号、いや、ワイズ・カオストーンものがたりの歴史は始まった

ブログ03（後書き）

死食經典義「今回で666号に名前が付きまして」

ワイズ「666号改めワイズ・カストーンだ。ま、宜しく頼むわ」

死「アルハザードや賢者の石などの設定は、俺独自のものなのでご了承ください」

ワ「文句があつたらどんどん言ってい。相手してやっからよ」

死「喧嘩口調はやめてっ!？」

ワ「知るか」

死「まだブログしかないですが、感想などもらえると嬉しいですよ。では、また次回会いましょう」

無印編プロローグ01（前書き）

死食經典義「遅くなりました。混沌の賢人、更新です」

ワイズ「おせえんだよ、マダオ！」

死「ひどっ!？」

無印編プロローグ01

ワイズがアルと出合ったときからはるかな時間が流れた

ワイズは様々な世界を渡り歩き、知識を深め、力を手にしていった

そして彼は今、第97管理外世界・地球に5年ほど前から居を構えている

構えるまでは管理世界や観測世界などにいたこともあったのだが、「不便！！」という同居人の意見と、管理局からなるべく離れている場所ということで地球に住むことになった

彼がいる場所は、地球は海鳴市の高級マンションの一室

その部屋の中は、なんと漫画やゲームで埋め尽くされていた

「むむっ！！この『螺旋丸』はなかなかいいな。おっと、こっちの
PSYREN - サイレン - の『暴王の月』メルセス・ドアも使えそうじゃねえか」

（ねえねえ。ネギま！の『ディオス・テュコス雷の斧』とか『キリブル・アストラペー千の雷』もいいと思うよ）

「ああ、いい案だな。よし、どっかの無人世界で練習してみつか」

彼は地球は日本のアニメ、漫画文化から、実際に出来そう、使えそうな技などを見つけ、己のものとしている

オタクの手前までなっているのかもしれないが

「さて、いくか」

（おーう）

その声と共に魔法陣が現れ、部屋からワイズを転送。彼の姿は部屋からなくなった

ワイズが転移を行ってから数時間、とある無人世界の建物の中に彼はいた

彼の周りは地面のあちこちに穴が空いていたり、建物の壁が粉々になっっていたりしている

「うーん、こんなもんかねえ？」

（いい感じ、いい感じ あ、そうだ 締め、あれやってよ）

「あれって・・・あれか？」

（うん）

「締めには丁度いいな、じゃーやるか」

そう言い、ワイズは部屋の部屋の外に出て空を見上げる

何処までも続く雲一つない蒼い空。それはワイズが生まれた日の空と酷似していた

(ワイズ?)

「あ、どした?」

(ぼけつと空見上げてどうしたのになって?)

「んや、何でもねーよ」

そう言い切り、ワイズは胸の前で両手首を合わせて手を開く構えを取った

「さて、締めには派手にいくとしよう」「そこまでだ!」・・・んだよ」

ワイズは構えを解いて空を見上げ、自分の言葉を遮った存在を見上げる

そこには、一人の男の子がいた

「これ以上の遺跡の破壊はストップしてもらおう!僕は時空管理局執務官、クロノ」ハラオウンだ。その権限でこれ以上の魔法使用の停止を命じる。速やかにデバイスを収める。詳しい事情を聞かせてもらおうか?」

「あゝっ!?知るか!」

男の子、クロノの命令を一刀両断して、再び構えをとるワイズ

「くっ、従わないなら力づくで聞いてもらおう!」

そんなクロノをワイズは一瞥し、構えた手の中に魔力を集中していく

「かぁゝゝ・・・」

「ステインガースナイプ！」

クロノが魔法を放つ、その数は10。それらは全てワイズに命中する。しかし、その魔法はワイズにダメージを与えることは出来ず、当たった瞬間に消えていった

「なっ！？」

「めえゝゝ・・・」

「（バリアか何かを張っているのか？）ならこれはどうだ！」

「はぁゝゝ・・・」

ワイズは胸の前に構えていた両手を腰の位置まで移動させる。移動させた手と手の間には集束された魔力が渦巻いていた

それを危険だと認識したクロノは、再度魔法を放つ。その数は25に増えていた

しかし、それらの先ほどと同じように当たった瞬間消えていった

「くっ！？」

「めえゝゝ・・・」

ワイズはそこでクロノに声をかけた

「おい、ガキ」

「餓鬼!？」

「一応手加減はしてやる」

「ふざけるな!ブレイズキャノン!!!」

「Blaze Cannon」

「警告はしたからな・・・」

クロノはそのまま砲撃を放つ。ワイズは慌てる様子もなく、その構えから放たれる技をクロノに抜けて解き放った

「波あつ!!!!!」

ワイズの放った一撃は、クロノのブレイズキャノンをあつさり飲み込んで消し去った

「そんな、馬鹿なっ・・・!？」

そして、威力を減少させることなくクロノへと到達する

「くっ!ラウンドシールドッ!!!」

「Round Shield」

ワイズの一撃が当たる直前に、防御魔法をクロノは発動する。が、

しかし、『かめはめ波』を防ぐには役不足だったのか、あっさりと破られた

「そんなっ・・・」

そんな台詞を残して、クロノは『かめはめ波』に飲み込まれ、爆発が起きて、爆発による煙がクロノを包み込んだ

「弱っちな・・・」

ぼそつとワイズは呟いた。その呟きと同時にクロノが落下し、大地に衝突した。

（まだ若いんだし、しかたないと思うよ）

「ま、俺には関係ね〜がな。さて、帰って飯にすっか」

（はい、ピザが食べたいです！）

「帰りに買ってくるか。たしか公園からが近かったな。なに喰うか決めとけよ」

（はい）

ワイズの足元に魔法陣が浮かび上がり、ワイズを転送する

転送が終わり、暫くすると煙が晴れてくる。煙が晴れた先にはクロノが一人倒れている

「くう・・・」

クロノは痛む体をなんとか立ち上げ、ワイズ達の姿を探し始める

そんな彼の眼前に、通信画面が現れた

《クロノ》

「かあさ・・・いえ、艦長」

《クロノ、戻って来なさい。その状態だと戦闘も碌に出来ないでしょう》

「で、でも・・・」

《これは命令よ》

「・・・わかりました。帰還します」

任務を達成できなかったためか、クロノの表情は厳しいものになっている

そんなクロノの足元に転送用の魔法陣が浮かび、クロノを彼が所属する船・アースラへと転送が始まる

クロノの転送が完了すると、そこには穴の開いた地面と崩れた壁だけが物言わず、ただ静かに青い空を見つめていた

クロノとの戦闘のあと、ワイズは海鳴の公園に転移してきた

（さあ、ピザが私を待ってる。レッツゴー！）

「今更だけどよ、デリバリでもよかったんじゃないか？」

（デリバリよりも、直接買いに行く方が好きなの！！）

「いや、実際に買うのは俺なんだが……ん？子供？」

ワイズは公園のベンチに座り俯いている一人の少女が目に入り、一端話を切り上げた

「わりいが、先にアレをどうにかしようと思う。そろそろ暗くなる時間だっつーのに一人でいるのは危険だからな」

ワイズは見つけた少女を見ながら言った

（ワイズは本当に子供には優しいね）

「そーでもないだろ。普通だって、普通」

ワイズは子供が座っているベンチに近づいていく。その少女は俯いて、しかも泣いていたため、ワイズが近づいていることに全く気がついていない

彼がベンチに辿り着いて少女の横に座っても、少女は俯き泣いたままだった

「ううう……」

「おい、嬢ちゃん」

「ふえ？」

ワイズが話しかけられたことで、少女は始めてワイズに気がついた

「じょうちゃんって、なのはのことなの？」

「ああ、周りにはほかに誰もいないっの。んで、どーして泣いてたんだ？」

ワイズは優しく少女、なのはに聞いた

「あのね、お父さんがけがをしちゃって、びょういんにゆういんしてるの」

見ず知らずのワイズに素直に答えるなのは。ワイズは彼女の涙を拭きながら更に訊ねる

「ふむ、それで家族はお父さんの看病か？」

「・・・うつん、お母さんもおねえちゃんも、おみせがいそがしいの」

「そーか・・・」

「おにいちゃんもいるけど、ちょっとこわくて・・・でもなのははひとりでへいきなの」

子供特有の支離滅裂な話し方で話すなのは。ワイズはそんななのは

に優しく質問をする

「そのお兄さんはどんな風に怖いんだ？」

「・・・なにかおこってるみたいなの」

「そうか。それでなのはちゃんは一人で公園にいたつーことか」

「うん・・・そうなの」

そう言いまたなのはは俯いてしまった

（さて、どーすつかねえ・・・このままこの子を送ってもいいんだが・・・）

（ね、ワイズ。花火でも見せてあげたら？きっと喜ぶよ）

（おお、珍しくいいアイディアを出すじゃねえか。魔法のコントロールは任せるぜ）

（珍しくは余計だよ！）

ワイズはベンチから立ち上がり、なのはの前に移動ししゃがみこんだ

「なあ、なのはちゃん。花火は好きか」

「はなび？」

「そ、空にどーんってなる、あの花火だ」

ワイズは右手に魔力を集める

「『サギタ・マギカ魔法の射手・連弾・セリエス光の30矢』!」

集められた魔力を光の矢にして空に撃ち放つ

打ち上げられた光の矢は、ある程度の高さまで上がり、2個一組に分かれて互いにぶつかり合う。そして魔力を弾けさせる

弾けた魔力は円状に広がり、光の花を空に作り出す。

弾け広がった魔力の光が薄暗くなってきた当たり一面を明るく照らし出す

「うわぁ、きれいな」

全ての光の矢が光の花に変わり、辺りが薄暗くなる。それでもなのは空を見上げて、先ほどの光景を思い浮かべている

ワイズはそんななのはの横にしゃがみ込み、頭に手を載せる

「どうだ、気に入ったか」

「うん!とってもきれいだったの!」

「そうか、気に入ったのは何よりだ」

なのはの顔には先ほどまでの影はなく、年相応の少女の笑顔が戻っていた

「さて、そろそろ家に帰るぜ。送っていつてやるよ」

「はいなの」

するとワイズはなのはの背に周り、彼女を持ち上げる

「にゃにゃ!？」

突然のことになのはは驚くが、ワイズは気にせず、そのままなのはを持ち上げて肩車をした

「道案内よろしくー」

「あ・・・あっちなの」

突然肩車をされたことに驚いていたなのはだが、ワイズの言っていることを理解したようで道案内を始めた

（本当にワイズは子供に優しいって言うか、甘いね〜）

（うっせー）

「あ・・・」

「ん、どした〜？」

公園から出て暫くしたところ、なのはがワイズに話しかけた

「さっきのひかりはなんだたの？」

「ああ、あれか。あれは、そだな。わかり易くゆーと、魔法だ」

「まほう？じゃあ、えつと・・・」

何かを言おうとしているが何と云っていいのか判らず、なのは言葉が止まった

ワイズは訝しげにもらったが、自分の名前をお教えていなかったことに気がつき、なのはに名前を教えた

「おっと、名前教えてなかったな。俺はワイズだ、ワイズ・カオストーン」

「ありがとうなの、ワイズさん。うんと、ワイズさんはまほうつかいなの？」

「そうだな、俺は魔法使いだ」

別段隠すことでもないの、あっさり魔法使いだと言うことをワイズは認める

「すごい！ほんもののまほうつかいなのー！！」

「おっと、そこで余りはしゃぐな。落ちっぞ」

「あ、ごめんなさいなの。でもほんとうにすごいなのー！！」

魔法使いに会えたことがよほど嬉しいのか、なのはのテンションは

高い

「おかあさんやおねえちゃんにじまんするの！」

「おっと、それは駄目だ」

そんななのはにワイズはストップをかけた

「どうしてなの？」

「魔法使いは普通は正体は隠しておくもなんだ。なのはちゃんに教えたのは特別なんだよ」

「むー・・・わかったなの。ないしょにするってやくそくするの」

「よし、いい子だ」

日が落ちかけている道を、そんな話をしながら二人は歩いていった

「ついたの！ここなの」

「お、ここか」

なのはの案内で翠屋に到着したワイズとなのは

ワイズはなのはを肩車したまま、器用に店の扉を開けて中に入った

「あ、いらっしやいませ・・・あ、なのはー！」

店に入ったワイズとなのはに大慌てで駆け寄ってくる女性がいた

「おかあさん、ただいまなの！」

ワイズの肩から降りながらその女性、なのはの母親に言った

「もう、心配したんから・・・えっと、彼方は？」

なのはの母親は、なのはを抱き上げながら、ワイズに訪ねた。その目は多少なりともワイズを警戒しているようにも感じられる

「あ、俺はワイズ、ワイズ・カオストーンだ。公園になのはちゃんが一人でいたんでな、お節介だったかもしれないがここまで送らせてもらった」

「あ、そうだったんですか。すみません、どうも有難う御座います」

事情がわかり、警戒をとりて礼をするなのはの母親

「それで、なのはちゃんのお母さ「桃子です。高町桃子」・・・桃子さん、ここって喫茶店か？」

「ええ、喫茶店翠屋。私達の店ですよ」

「何か注文してもいいか？腹が減っててな」

ワイズは苦笑を浮かべながら訪ねた。なのはと会っていなければ、今頃はピザを食べていたのだから

「ええ、もちろん。どうぞこちらに」

桃子は笑みを浮かべ、ワイズを席に案内する

「ご注文が決まったら呼んで下さいね」

「ああ」

メニュー表を見ているワイズに、桃子はそいいカウンターへと戻っていった

「さて、何喰うかねえ」

「オムライスがおいしいの」

ワイズの正面には、何故かなのはが座っていた

「・・・お母さんと一緒に行ったんじゃねえのか？」

「かたづけにちょっとじかんかかるから、ここでたべていきなさいって」

「ん、そうか」

そう言い、ワイズは再びメニュー表に視線を移す

（ワイズ・・・私も食べたい・・・）

「（今は我慢しろ。いきなりお前が出てきたら変だろーが）」

（うう・・・じゃあ、ここに書いてある持ち帰りのケーキを買って！）

「（オツケーオツケー）んじゃ、なのはちゃんお勧めのオムライスにするか。おい、注文いいか？」

「はい、ただいまー」

カウンターの方から桃子とは別の声が聞こえ、その声の主が注文を取りにやってきた

「あ、あなたがなのはを送ってくれたワイズさんですか。わたし、なのはの姉の美由希です」

「おう。俺はワイズ・カオストーンだ。んで、注文いいか？」

「あ、ごめんなさい。では、ご注文をどうぞ」

「オムライスとブレンドコーヒー。あと持ち帰りで、ガトーショコラとチーズケーキとミックスベリーのタルトを各2個づつ」

「なのはもオムライスなの」

ワイズと一緒にちゃっかりと自分の分も言うなのはに、ワイズと美由希は苦笑を浮かべる。当の本人は何故笑われているのか判っておらず首を傾げているが

「ご注文承りました。少々お待ちください」

美由希はカウンターの奥へと戻っていった。暫くすると奥の方から

玉子が焼けるいい香りがしてきた

「おお、いい香りだな」

「ほっぺたがおちるくらいおいしいなの」

なのはは笑顔を浮かべ、オムライスがくるのを今か今かと待っていた
そんななのはに、ワイズはふと気になったことを訊ねた

「なのはちゃん。なのはちゃんはお父さんの見舞いには行ってるのか？」

「あまりいけてないの・・・」

「ふむ、なら今度俺と一緒に行かねえか？大人と一緒になら心配こともねーだろうしょ」

「あら、それならお願いしちゃおうかしら」

「うおっ!？」

ワイズの横に突然桃子が現れ、ワイズは背を仰け反らせた

（俺が気配に全く気がつけねえて、桃子さんは何モンだ!？）

「コレくらいは嗜みですよ」

「いやいや、そんな嗜みはねえって、つか人の考えを読み取るな!？」

「顔を見れば考えることはわかりますよ」

そう言われワイズは思わず顔に手を当ててしまった。まあ、条件反射みたいなものだろう

「はい、ご注文のオムライスとブレンドコーヒーです。私達もお店が忙しくて、なかなかなのはを連れて行けないんですよ。もし良かったらなのはと一緒に見舞いにいてもらえないでしょうか？」

「お、なのはちゃんのゆーとおり美味そうだな。見舞いの方はオツケーだ。明日にでも一緒に行くぜ」

「ふふ、ありがとうございます」

「つーわけで、なのはちゃん。明日昼飯喰ったら公園のあのベンチに集合な」

「わかったなの！ワイズさんありがとうなの！」

父親の見舞いにいけるのが嬉しいのか、なのはは満面の笑みを浮かべている

そんななのはの様子に、ワイズと桃子にも笑顔が浮かんでいた

「さて、冷める前に食べるとすつか」

「いただきますなの！」

「コーヒーのお替りがあったら言ってくださいね」

これが、混沌の賢人とエースオブエースと呼ばれることになることになる高町なのはの出会いの日のお話

（ケーキケーキケーキケーキイイイイイ！！）

「（帰ったら食わせてやるから、黙れっ！うつせえ！）」

無印編プロローグ01（後書き）

死食經典義「はい、と言うわけで無印編のプロローグでした」

ワイズ「おいおい・・・時間が飛びすぎだろおがよ」

死「あの後も書いてると、プロローグが10くらいまで行っちゃうのよ。まあ、その部分は外伝みたいな形で出す予定だから、安心しておけ」

ワイズ「ま、そのままお蔵入りでも俺は構わねえけどよ」

死「おいおい・・・」

ワイズ「おっと、読者に連絡だ。気が向いたら感想を書いてくれや。俺に稽古付けてくれるやつも大歓迎だぜ」

死「まあ、お前みたいなやつと戦いたいって人はそういないだろうけどな」

ワイズ「てめえは吹っ飛んどけっ！！」
サギタ・マギカ セリエス・イグニス
『魔法の射手火の三矢』！！
炎華崩拳」

死「また次回会いましょう~~~~~（キラーン）」

無印編ブログ02（前書き）

死食経典義「久々の更新で御座いますです」

ワイズ「こっちは不定期更新だったか？」

死「いやゝ、もう1つの方もあるからねえ。なかなか手が回らないのよ」

ワイズ「何つつたけかねえ。ああ、そーだ。二頭を追うものは一頭も得ず、だ」

無印編プロローグ02

ワイズとなのはが出合った翌日の昼前。ワイズは喫茶翠屋に来ていた

「どもー」

「あら、ワイズさん？ 確か約束はお昼過ぎでしたよね？」

桃子がワイズに気がつき、昼前に来たことを聞いた

「ああ、昼飯作るんがめんどーでな。悪いけどなんか頼むわ」

「サンドイッチで良ければ直ぐ出来ますよ」

「んじゃ、それで」

少し待っててくださいねと言い、桃子はカウンターに下がった。それと入れ替わりで、なのはがやってきた

「ワイズさん。こんにちはなの」

「よう。俺の飯終わったら約束通り、お父さんの見舞いに行くか」

「はいなの」

ワイズはやってきたなのはとお父さんが元気になったら何をしたいかなど、とめどない話を始めた

そんなワイズを一人の青年、なのはの兄である恭也がカウンターの

影から見ていた

・・・いや睨み付けていたといったほうが正しいかもしれない。その視線には微弱だが殺気が込められていた

ワイズはその視線を完全に無視し、なのはと喋っている

そんなワイズに興味が無くなったのか、恭也はカウンターの奥へと戻っていった

（ねえ、ワイズ。いいの？無視してたけど？）

（ふん。周りが見えていないド三流の阿呆なんぞは放っておけ）

ワイズは昼食のサンドイッチが来るまで、そのままなのはと喋り続けた

昼食を食べ終わったワイズは、なのはの案内で彼の父親の高町士郎がいる病室に来ていた

「おとうさん、おまいにきたの」

しかし士郎は意識が無いのか反応しない。全身に包帯が巻かれ、点滴などのチューブが付けられており、一目見ただけで重病人と判る

「おとうさん、はやくおきてなの・・・」

そんな状態の父親を見たためか、なのはの目には涙が溜まって来て

いた

ワイズは、そんななのは頭を撫でながら言う

「なのはちゃん。んな顔してつと、お父さんに元気が行かねえぞ。ほら、笑顔だ、笑え」

「ワイズさん・・・うん、おとうさんにげんきをあげるの！」

なのははそう言いながら、服の袖で涙を拭く

「ま、取り合えず顔洗ってこい。ひでえ顔になってっからな」

「はにゃ!？」

ワイズに言われ、なのはは自分のをぺたぺたと触った

「か、かおあらってくるなの／＼」

ワイズに泣き顔を見られたせいかどうかはわからないが、顔を赤くしながらなのはは顔を洗いに行った

「・・・さてと。この状態、お前なら何処まで直せる?」

ワイズと士郎しかない病室で、ワイズは誰かに話しかける

（そうね。一回の回復魔法でなら会話とある程度動けるところまでは出来るかな。それと一緒に自己回復能力も強化させるよ）

「OKOK。ならとつとやっちまおう」

（でもさ。相変わらず、子供には甘いよね）

「無駄に時間かけてつとなのはちゃんに戻ってくつから、ちゃっちやとやるぞ」

（はいはい）

ワイズは左手で自分の額を掴んだ

「エンヴィー嫉妬、発動」

その言葉を言うと同時に、ワイズの体が仄かに光り、その姿が変わっていく

白銀の髪は黒く染まり、同じく瞳の色も銀から黒へと変わっていく。そして一番の変化はその体形が男性から女性に変わったことである
ワイズの全身が完全に別人へと変化し終わると、光も消えていった

「んじゃ、コントロールは任せる」

「はい。それじゃいくよ」

女性へと変化したワイズの口から2種類の声が紡がれた。1つは先ほどまでと同じワイズの声。もう1つは女性の声で、その口調もワイズのものとは異なっていた

「優しき光よ。彼の者を癒したまふ」

詠唱と共に右手に光が集まり、球を形作る。その光球はワイズの右手から離れ、士郎の上へと移動した

キーン、と高い音が病室に響き、光球が弾けた

その響きと同時に士郎の体を白い光が包み込んだ

その白い光りは10秒足らずで消えていった

「これでよし」

「悪いな。どうも回復系統は苦手だよ」

「気にしない。適材適所っていうじゃん」

そのとき、少し遠くから誰かが駆けてくる音が聞こえてきた

「おっと、なのはちゃんが帰ってくんな。あとで翠屋でケーキ買っておく」

「楽しみにしてるよ」

ワイズは先ほどとは違い、今度は右手で自分の額を掴む

「エンヴィー
嫉妬、解除」

その言葉を発した途端、ワイズの姿は一瞬で元の姿に戻った

ワイズの姿が戻ったと同時に、なのはが病室に戻ってきた

「ワイズさん、ただいまなの」

顔を洗ったあと、走って戻ってきたのか、多少息が切れている

「おかえり。なのはちゃん（ギリギリ今のは見られてねえみたいだな）」

（見られても別にいいんじゃない？もう自分が魔法を使えるって話してるんだし）

「（説明がめんどーなんだよ）」

「う、ううんっ・・・」

なのはの声に反応したのか、タイミング良く士郎が目を覚ました

「おとうさん！！??」

「な、なのは？それにここは・・・?」

目が覚めると目の前にはなのはがいて、見覚えの無い部屋にいた為に士郎は状況が掴めていない様子である

「なのはちゃん。お父さんの目が覚めたことを、ここの医者せんせに教えてきてやんな」

「はいなの！いそいでいつてくるの!!」

ワイズに頼まれたなのはは、全速力で病室から駆け出していった

「廊下は走んな、ってもういねえや」

「ええっと、君は一体・・・？それにここは？」

「俺はワイズ・カオストーン。なのはちゃんと最近知り合った。んで、ここは病院の病室だ。なんで此処にあんたがいるかまでは知らねえよ」

ワイズはなのはと此処に来た理由も士郎に説明した

魔法を使つて怪我を癒したことも含めてだ

「魔法か・・・俄かには信じられないが・・・君の目は嘘を言つてはいないようだ。信じるよ」

「おいおい・・・いーのか。そんなあつさり信じて」

「それでも人を見る目には自身があるからね」

ワイズの目をじつと見つめて士郎は言った。そんな士郎にワイズは思わず溜息を出してしまった

「はあ、さいですか。あ、魔法のことは秘密にしておいてくれな。こつちもいろいろとあるんでよ」

「うん。わかつたよ」

「怪我の方は1週間もすれば完治するだろ。直つたらよ、なのはちゃんの兄ちゃんとやらをこつてりと絞つてくんな」

「恭也をかい？なんでまた？」

「1、妹であるのはちゃんを放りっぱなしにした。2、この俺を殺気の籠った視線で見してきた。3、周りの見えてねえド三流には再教育が必要」

昼に感じた恭也の視線のことを言っているのだろう。無視はしていたが、根に持っていたらしい

「そこまで酷いのかい？」

「さあ？俺は今日初めてアレを認識したんでな。なのはちゃんに聞いた方が早えよ」

「そうか・・・どんな感じなのかはなのはから聞くよ」

「そーしてくれ。っと、医者せんせが来た見てえだな。俺はここらで暇いとまさせてもらうぜ。暫くしたら桃子さんなり誰か来んだろから、あとは家族で仲良くやんな」

ワイズはドアの方に振り向くのと同時にドアが開き、なのはと医者が入ってきた

医者はすぐに士郎を診始めた

「さて、俺は帰るぜ。この後人と会う用事があるんでね」

「・・・うん」

ワイズが帰ると言った途端、なのはの顔に影が差し込んだ

「そう暗い顔すんなつての。明日また翠屋に行っからよ」

「！！ うん、まってるなの」

なのはの顔に笑顔が戻ったのを確認したワイズは、病室から出て行った

なのはと別れてから1時間ほどたったころ、ワイズは海鳴臨海公園にいた

「さて、そろそろの筈なんだが・・・？」

ワイズの呟きに、タイミングを合わせたように地面に魔法陣が浮かび上がった

魔法陣の光が収まると、そこには6人の人影が在った

「よお、お疲れさん」

その6人にワイズは労いの言葉をかけた

「うん、ただいま」

と、小柄なストレートの金髪の女性

「出迎えありがとう」

こちらは先ほどの女性と同じ金髪だが、ウェーブがかかっている

「只今戻りました」

礼儀正しいのは青いショートヘアの女性

「おー、戻ったぜ」

ラフに返したのは黒のロングヘアをポニーテールにしている女性

「・・・ただいま」

ぼそつと返したのは、見た目が小学生くらいでライトグリーンのセミロングの女の子

「別段疲れてはいないわよ」

素っ気無く返したのは白髪のショートヘアの女性

各自が思い思いの言葉でワイズに返していく

全員女性というところは、この際置いておこう

「んじゃ、暫くの間は休息だ。各自ちゃんと休めよ」

すると金髪の女性二人がワイズの腕に自らの腕を絡め、体を密着させた

「久しぶりのワイズの匂いだ」

「頑張ったご褒美。もちろんくれるわよね」

「・・・俺は休めつーたんだが？」

その二人の行動に、ワイズは思わず溜息をこぼす

「ん？」

後ろから引つ張られるのを感じ、首をまわしワイズは後ろを見る

まわした視線の先には、ライトグリーンの髪の子と白髪の女性が服の裾を掴んでいるのが映った

「・・・わたしも、ご褒美ほしい」

「わ、私は別にご褒美なんて・・・」

なら何故掴むのだろうか

「いらねえのか？」

「うつ・・・・・・欲しい・・・」

青い髪の女性と黒い髪の女性は言葉には出していないが、視線が自分も欲しいと訴えているのがわかる

「あー・・・わかったわかった、好きなもんやつから。取り合えず場所、移動しようや」

「「「「「はい」「」「」「」」」」

6人の女性を引き連れて、ワイズは臨海公園を後にした

ワイズが士郎に治癒魔法をかけてから1週間後、士郎は無事退院し、喫茶翠屋に帰ることが出来た

士郎の回復速度に医師達は驚いていたが、魔法で直しましたといっても到底信じないだろう

何はともあれ、士郎は家族の元に戻ることが出来た

そんな彼は、ワイズに御礼をしたいということで、彼を翠屋に呼んでいた

「で、士郎さん？　そこなド三流は何故に俺に睨みをきかせてんだ？」

現在進行形でワイズは恭也に睨まれているのだ。彼が翠屋についてからずっとである

「ははは・・・恭也を叩きなおした時に、君の事を話してしまっただね。どうも君のことが個人的に気に入らないみたいだよ」

「・・・・・・・・それは叩きなおしたって言わねえんじゃないのか、おい」

全く持ってその通りである

ワイズは溜息をこぼしつつ、恭也の方を向く

「おい、そのド三流」

「それは、誰に言っているんだ!!」

いきなり話しかけられたことに驚きつつも、恭也はワイズに切り返す

「てめえ以外いねえだろーがよ、阿呆。言いたいことがあるならばつきり言いやがれ。気色悪い視線向けられたままじゃ、美味しい茶も不味くなるってもんよ」

「くっ・・・いいだろう、正直に言おう。お前が気に食わない。少々相手をしてもらおう」

「いいねえいいねえ。その無駄にあるプライド、へし折ってやんよ」

恭也の後ろをワイズは追っていき、道場へと入っていった

道場に入ると、恭也がワイズに木刀を投げて渡す

審判はどうやら士郎がやるようだ

「すまないね、ワイズ君」

士郎がワイズに謝罪の言葉告げた

「気にすんなって。それよりもだ・・・・・・・・いいんか、なのはちやんここにいても」

ワイズは士郎の後ろに座っているのはをちらつと見ながら聞いた

「危ないと思ったら止めるから、大丈夫だよ」

「そっかい。んじゃ、頼むわ」

ワイズはそれだけを言い、恭也に向かい直した

「始める前に、互いに挨拶を」

「……永久不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術、高町恭也……」

恭也は父に言われたためか、渋々つといった感じで名乗りをした

「あ……うん。我流なんちゃって剣術、ワイズ・カオストーン
つてここかね」

「……ふざけているのか」

「うんにゃ。我流で名前ねえからよ、適当に言っただけだ」

世間一般では、それを巫山戯ているというのだが

「さ、士郎さん。合図よろしく」

「互いに開始線まで………始め！」

士郎の合図と共に、恭也の姿が消える。直後、ワイズが地面と垂直に吹き飛んだ

「ワイズさん!？」

「奥義之式『虎乱』」

ワイズがいた場所には、今は恭也が立っていた

開始合図と共に『神速』で突撃し、二刀で放つ斬撃の技、奥義之式『虎乱』をワイズに当てたようだ

「この程度「あーくそ。ちょっと痛かったぞ」なに!？」

あっさりと吹き飛んだワイズを一瞥していた恭也だったが、何事も無かったかのように立ち上がったワイズを見て、その顔に驚愕を浮かべた

「いやゝ、思ってたより速えし威力もあったからよ、ちょっと驚いたぜ」

「手ごたえは確かにあった・・・なのに、何事も無かったように立ち上がるなんて・・・!？」

立ち上がったワイズは、木刀を2度3度振り、恭也の前に移動した

「ほれ、もっと打ち込んでこいよ、ド三流」

「なら、望み通りにしてやる!!」

ワイズの安い挑発に恭也は乗った

再び神速を使い、その姿が消える。そして再度、ワイズが5メートルほど吹き飛んだ

「ワイズさんっ！！？？だいじょうぶなの！？」

「奥義之陸『薙旋』！今度こそ確実に入った！！」

奥義之陸『薙旋』は抜刀術から始まる4連撃。神速もあわせて使ったものは、同じ『神速』を使うもの以外には見切ることは不可能を言われている技だ

言われているのだが・・・

「ふん。コレで終わりか？」

ワイズは先ほどと同じように、何事も無かったかのように再び立ち上がった

「んじゃ、今度はこっちが行くぜっ！！」

「っ！！」

その台詞に、すぐさま恭也は反応したが、それよりもワイズの行動の方が早かった

一瞬のうちに恭也の懷に潜り込み、木刀を振るう

恭也はその攻撃を全て防いだが、その顔には再び驚愕が浮かんでいた
審判をしていた土郎の顔も同じく、驚愕が浮かんでいる

「なんで・・・なんでお前が『薙旋』を使える！！？」

「なんでで、さっきお前がやったのを、そのままやって見たただけだつーの。見よう見まねだから、防がれちったけどよ」

「なっ、見よう見まね！？」

そう、ワイズは見よう見まねで『薙旋』を使っていた

だが、先ほど恭也は使った『薙旋』は『神速』を組み合わせで使用していたものだ

つまりは、『神速中の薙旋をワイズは見ていた』と言うことになる

「『神速』を使っている俺の動きが見えていた・・・！？」

「俺も似たようこと出来っからな。さして驚くことじゃねえだろ」

ワイズは恭也に背を向けながら話し続ける

「さっきてめえが使ったの以外にも、『縮地』や『瞬動』、『超集中』なんてもんもあるんだよ。それらを使い合わせれば、あんなに簡単に見えるつーの」

ワイズは簡単と言うが、使い合わせることは簡単なんてものではない。むしろその真逆、ほぼ不可能といえる

その使い合わせが出来るのは、不老不死で無茶無謀が可能なワイズくらいだ

「さて、お喋りは終わりだ」

ワイズは恭也を左肩越しに見ながらそう言った

「てめえの小ささを教えてやるよ」

「ふざけ」手加減はしてやつけど、ちゃんと防御しろよん」っ！
「！」

恭也はワイズの言うことに耳を貸さず、背を向けているワイズに打ち込もうとした

だが、背を向けているのにもかかわらず、隙が見つけられずに攻められないでいた

そんな恭也を左肩越しに見ながら、ワイズは初めて構えをとった

恭也に背を向けているのは変わらず、木刀を自身の目の高さまで持つていき、目と水平に構える

その途端、辺りの空気が冷たくなるような感覚が道場に満ちた

静寂が道場を侵食していく。音も空気も時間さえも止まっているかのような錯覚に陥るほどの静寂

ごくろり・・・

その静寂の中、ワイズ以外の誰かが唾を飲み込んだ音が静かに響いた

それを合図にワイズは恭也へと踏み込んだ

「『秘剣』・・・」

恭也はワイズが何を行うのか、検討も付いていない。だが、剣士としての感が彼に防御の行動を取らせた

・・・この一撃を防いでカウンターを決める！

だが、恭也のこの考えは、ワイズの一撃の前に砕け散る

「『燕返し』！」

ワイズが放ったのは上段からの強烈な唐竹割り

恭也は両手の木刀を交差させ、その一撃を受け止めた

・・・手が痺れる・・・だが、ここでカウンターを！！

恭也は先ほどの考え通り、カウンターを放とうと木刀を返す

が、その瞬間、胴と逆胴の左右からの打ち込みが恭也を捉えた

「なっ・・・！！！？？」

だが恭也も御神流の剣士。『神速』を使い、打ち込みを後ろに下がり避けようと動いたが、完全には叶わなかった

「ぐっ！！！？」

胴の打ち込みこそ避けたが、逆胴の一撃が左腕に直撃した

「む・・・完全に入ってねーか。あの一瞬で『神速』を使って後ろに下がるつーのは良い判断だ」

打ち込んだ状態のまま、恭也の一瞬の行動をワイズは褒めた

「でもよ、この試合中その左腕は使えねえぜ」

骨こそ折れていないが、ワイズの一撃は恭也の左腕に木刀を持てないほどのダメージを与えていた

「まだだ！まだ右腕が残っている！！」

恭也は右腕をワイズに向け、まだ戦えることを告げた

「なら次で締めだ」

未だ戦う気にいる恭也に、ワイズは抜刀の構えを取ることで答えた

「まあ、手加減はしてやる。しっかりと防御しろよ」

ワイズが構えたことで、道場の空気が再び冷える感覚が満ちる

今度は先ほど違い、誰かが唾を飲み込むことなく、1秒、また1秒と時間が流れていく

二人が睨み合い始めてから1分が過ぎた時、ワイズが動いた

「飛天御剣流奥義！『あまかけりゆうのひらめき天翔龍閃』！！！！」

ワイズが抜刀の一撃を振るう

対する恭也は『神速』を使い、その攻撃範囲から逃れようと動いたしかし、その一振りは恭也が『神速』を使ってもなお、高速で振るわれていた

――こいつも神速みたいな技を使ってるのか！？

恭也はワイズの一撃をギリギリのところで交わすことに成功した

先ほどと同じように別方向からの攻撃も予想していたが、抜刀以外の攻撃は無かった

――カウンターを決めるなら今、なにっ！！？？

カウンターを決める為に動こうとした恭也だが、体が固定されたように動くことが出来なかった

さらに恭也は、自分の体がワイズに引き寄せられていることに気がつき、本日何度目かの驚きを覚えていた

そして、引き寄せられた先には振りぬいたまま1回転し、再度打ち込みを行うワイズの姿と自分の体に吸い込まれるように入ってくる木刀が視界に写った

そして、そのままワイズの一撃は恭也の体に打ち込まれた

「勝者、ワイズ・カオストーン！」

士郎がワイズの勝ちを告げる

試合の勝者であるワイズは、当たり前だといつや表情で士郎を見ていた

一方、敗者となった恭也は

「お、おにいちやん・・・だいじょうぶなの？」

『天翔龍閃』が直撃したために、意識が綺麗に刈り取られていた

「^{アレ}天翔龍閃は2撃目の方が威力上がったからな。暫くは起きねえよ」

「そうそう。あの技、『天翔龍閃』だったかな。飛天御剣流って言うてたけど、最初には我流って言うてなかったかい？」

そう、ワイズは試合開始の名乗りの際、我流なんちゃって剣術とはつきりと言っている

「ああ、それか」

するとワイズは何処からとも無く数冊の本を取り出した

「アレはこっから取った技なんでよ」

「・・・一体どこから取り出したんだい？」

「企業秘密だ」

士郎の問いはばつさりと切り捨てられた

なのはワイズの持っている本をじつと見つめ、一言

「まんが？」

「おう、『天翔龍閃』はこの『るろくに剣心』で出てくる技で、燕返しはこつちの『Fate/stay night』で出てきた技だぜ。知りたかったら読むんだな」

そう言い、ワイズは更に本を何処からとも無く取り出して、士郎となのはの前に積み上げていく

「本当に何処から出したんだい？」

「それは「きぎょうひみつなの?」……俺の台詞取るなや、なのはちゃん……ってもう読んでるし!？」

なのははワイズが出した本を読みながら突っ込んだようだ

未だ恭也が起きない中、なんともほのぼのとしているものだ

その後、何だかんだありながらも、ワイズは高町家と仲良くなり、なのはにとってのお兄ちゃん的立場となった

まあ、それが原因で、恭也と度々試合をすることになるのだが、それはまた別の機会で

そして時は緩やかにその流れを進めていく・・・

高町なのは、聖祥大学付属小学校の3年生の4月

その運命という名の流れが、大きくうねりを上げながら急速に流れ
を変える瞬間が近づいていた

無印編プロローグ02（後書き）

死食經典義「はい。今回でプロローグはお終い！次回からは無印編本編に入ります！！」

ワイズ「おい、俺が変幻したやつと、途中で出てきた6人。あれはどーすんだ？」

死「彼女らはね・・・」

ワイズ「は？」

死「ちよつとした顔見世です。暫くは出てきません」

ワイズ「・・・・・・・・」

死「では、最後にお礼を。クロ助様、えんヴいい様、感想有難う御座います。感謝の極みです」

ワイズ「極みか・・・よし、それにすつか」

死「にゅ？」

ワイズ「顔見世だけじゃなく、ちゃんと書けや。ド三流！二重の極み、ア”—————！！！！！！」

死「ちよ、それ禁s、ビルゴツ！！??」

ワイズ「ふう・・・作者を続投不能にしちまったんで、俺が代わり

に・・・また次回で会おうや!」

無印編第1話（前書き）

死食経典義「なんとか11月中に更新できたー！ー！！！」

ワイズ「遅えんだよ。もっとギリギリ更新しやがれ」

死「努力します・・・」

無印編第1話

地球は海鳴

黄昏時と言われる時間帯。もう数分で逢魔時おっまがどきと呼ばれる程に太陽が落ち、大地が紅く染まっている

周囲が樹木で蔽われ、今だ自然を残す中に通る道に一人の少年がいた

「ハア・・・ハア・・・」

その少年はマントを羽織っていて判り難いが、少年は腕から血を流していた

キーンというハウリング音にも似た音が響き渡る

黄色っぽい髪の色をした少年はその音に反応し、横に振り向いた

そこには赤く目を光らせる黒い物体・・・いや、黒い生物のようなものがいた

少年は腰のポーチから小さな赤い珠を取り出し正面に掲げた

するとどうだろう。赤い珠は光だし、珠を中心に黄緑色の大きな丸の中にさらに丸を描き出した。円と円の間には見たことのない文字が現れた

さらに内円の中に2つの正方形が現れ、それぞれが左右別々に回り始める。その2つの正方形の中に各辺の midpoint と接するように始めに

現れた2つの円と同じものが描かれた

その筋の人が見れば、魔方阵だ！と言うのだろうが、この場にいるのは少年と黒い生物だけである

それを見た黒い生物は少年に向け走り出した

「くっ……妙なる響き、光となれ！赦されざる者を封印の輪に！」

少年が何かを唱え終えたのと同時に、黒い生物は飛び上がり少年に襲い掛かった

「ジュエルシード、封印！！！！」

黒い生物は走った勢いを弱めることなく赤い珠が描いた魔方阵に衝突

魔方阵は強く光りだし、その光は周囲を明るく照らした

その光と共に衝撃波もでていたのか、黒い生物は吹き飛ばされた

黒い生物はダメージを負ったのか、体を地面に滑らせるようにして少年の前から逃げていった

それを見た少年は膝をついた

「逃がし………ちゃった………追っかけ………なく………ちゃ………」

その言葉とは裏腹に、体力の限界だったのだろっ、少年はそのまま

地面に倒れこんでしまった

「誰か……僕の声聞いて……力を貸して……魔法の……力を……」

そう呟くと少年の体が光りだす

光が収まると、少年は傷付いたフェレットの姿になった。そして、そのすぐ側に、少年が手にしていた赤い珠が落ちた

その頃、この話の主人公であるワイズはというと……

「うはははははははは——！！！！コレで100連勝つ
————！！！！」

海鳴にあるゲームセンターにてGVGEXVSをやっていた。使用機体はスサノオ。挑戦者を全員格闘で滅多切りにしていたりする

「うははははっ！！快調快調、次の挑戦者は誰だ——！！！！！」

そんなワイズに声が届いた。黒い生物と戦っていた少年の声だ

（力を貸して．．．．．魔法の．．．．．力を．．．．．）

少年の願い。ワイズなら造作も無く叶えられる程度の願い……。
・なのだが、現実には厳しいものであり

（うっせー！こっちは今急が楽しいとこなんだよっ！！）

（そーだそーだ！！いいとこなんだー！！）

なんとも酷い話である

世界は何が起ころうとも何時も通りに太陽を昇らせる

蒼く澄み渡る空、蒼く輝く海、ビルや民家が立ち並ぶ市街地

そんな市街地のとある家にある部屋から音楽が鳴り響いた

音楽の発信源は1機の携帯電話

その持ち主は携帯を止めようと手を伸ばすが、誤ってベットから落としてしまった。が、すぐに布団から手が伸び携帯を止めて拾った

携帯の持ち主が布団から起き上がり、寝ぼけ眼をこすりながら起床した

ブラウンの髪を肩を少し超えるくらいまで伸ばしたセミロングの少女

彼女の名前は高町なのは。この物語のヒロインの一人にあたる少女である

「なんか、変な夢みちゃった」

窓の外では雀が鳴き、その窓から差し込む朝の光を見たなのはは可愛く、ん〜と伸びをした

彼女は聖祥付属の制服に着替え、洗面所で髪を結ってツインテールにした

「おはよう」

リビングに駆け足して入った彼女はキッチンに立つのはと同じ髪色の女性、母・桃子の所まで行った

「おはよう」

椅子に座り新聞を読んでいた土郎は新聞を下に置き、挨拶を返した

「おはよう、なのは」

「はい、これお願いね」

桃子は数個のコップを乗せたお盆をなのはに渡す

「はい」

土郎は挨拶をしたのに振り向いてくれないのはを見て、テーブルに『の』を書いている

が、なのはがテーブルにコップを持ってくると、即座に持ち直した

「ちゃんと一人で起きられたなあ、偉いぞ」

テーブルにコップを並べるのはを手招きし、その頭を撫でだした

親馬鹿？

「朝ご飯もすぐ出来るからね」

「はーい。あれ？お兄ちゃんとお姉ちゃんは？」

なのはは士郎に頭を撫でられながら、兄達がいなことを尋ねた

「ああ、道場にいるんじゃないか？」

「呼んでくるね」

「フンツ・・・えい！」

高町家にある道場では美由希が木刀で素振りをしていて、恭也が倒れていた

その時に道場の扉が開いて、なのはが顔を出した

「お兄ちゃん、お姉ちゃんおはよう朝ご飯だよ・・・・・・なんで倒れてるの、お兄ちゃん？」

「・・・おはよう」

「あつ、なのは。おはよう」

「おはよー、なのはちゃん」

「あ、ワイズさん。おはようなの！」

倒れている恭也の側にワイズが立っていた。どうやら彼は恭也と模倣戦をして、打ちのめしたところだったらしい

しかし何故彼が模擬戦をしていたのか

理由は恭也がワイズに負けて暫く経たった頃に遡る

ワイズに負けた恭也は、その後もちよくちよくワイズに模擬戦を挑んでいたのだ。ずっと負け通しではあるが・・・

その模擬戦は朝だったり夜だったりと時間帯は一定しておらず、今日は偶々朝にやっていたようである

なのはは木刀を持って素振りをする美由希にタオルを投げ渡す

「ありがとう」

そしてなのははワイズの所まで行き、直接タオルを手渡した。その後、恭也の顔に乗せた。

なのはがいたずらをするようになったのは、ワイズの影響である。

恭也は「俺は死んでない！」と叫びながらタオルを取った

なのはの二人に対する扱いが違うが、なのは曰く「ワイズさんは特別なの！」とのこと

本人に自覚はないかもしれないが、恋心がそうさせているのかもしれない

「ありがとな、なのはちゃん。さて、負け犬^{きょしゅ}、なのはちゃんが来たから今回はココまでだ」

「呼び方に悪意を感じるが……じゃあ美由希、今朝はここまで」

「はい、じゃあ続きは学校から帰ってからね？」

「って、ことだ。なのはちゃん、朝飯食いに行くぞ」

「はい」

恭也以外の3人は道場から出たが、恭也は一人道場で倒れたままだ

「う……動けん……」

思っていたよりもワイズとの模擬戦のダメージが大きかったようだ

「ん　今朝も美味しいなあ。特にこのスクランブルエッグが」

「本当っ？トッピングのトマトとチーズ、それからバジルが隠し味なの？」

「みんな、あれだぞ。こんな料理上手なお母さんを持って幸せなんだから分かってるのか？」

家族5人＋ワイズが食卓を囲み仲良さそうに話している。恭也はなんとか戻ってこれたようだ

ちなみに席順は士郎の隣に桃子。その反対側の真ん中に恭也、その左側に美由希、右側にワイズで、ワイズの膝の上になのはが座って

いる

ワイズが模擬戦をやった後は、大体高町家で食事を取っている。そのたび、なのはワイズの膝の上に座るようになっていた。用は甘えているのである

最初のうちは恭也がワイズに文句を言っていたのだが、なのはの「そんなお兄ちゃん、きれい!!」発言で泣く泣く引き下がったというシスコンは妹には勝てないようである

「んもゝ分かってるよ。ね、なのは？」

「うん!!」

「あゝん、もうやだあゝあなたったら フッフ」

「んゝ？」

「「アハハハ」」

いまだ新婚気分バリバリの会話をする高町夫妻。見た目もそうだが、本当にいろんな意味で若い夫婦である

「美由希、リボンが曲がってる」

「えっ？本当？」

「ほら、貸して見る」

恭也は美由希の制服のリボンが曲がっていることに気づき、その修正のために手を伸ばして直し始める

「……………いいか、なのはちゃん。こんな風に言っただけで胸タッチをする気なんだ」

その様子を見ていたワイズはあることないことをなのはに吹き込んでいた

「……………お兄ちゃん不潔なの!」

「そんなこと、誰がするか!」

ワイズがいるだけで会話が盛り上がる、とは高町夫妻談。いじられる対象の恭也からすればいい迷惑である

「おはようございます」

スクールバスに乗ったなのははこれまた元気に挨拶をした

「なのはちゃん!」

そんななのはに声をかけてきたのは、彼女の友人のアリサ・バニングスと月村すずかの二人

「あつ？」

「なのはこっちこっち」

2人は一番奥の椅子に座りながら手を振っていた

「すずかちゃん、アリサちゃん」

「おはよう」

「おはよう、なのはちゃん」

アリサは右に少しずれてなのはの座るスペースを空ける

「おはよう」

席に座ったなのはに、アリサが話しかけた

「ねえ、なのは。明日とかワイズは暇かな？この前のリベンジしたいんだけど」

この二人がワイズのことを知っているのは、なのはが紹介した為である

その際、ワイズが部屋でゲームでもと言ったのが始まりで、ワイズとアリサはゲーム仲間になっていた

ワイズの部屋にはありとあらゆるゲームが揃っていたため、アリサは興味を持ったゲームでワイズに挑戦。負けてはまた挑戦の繰り返しの中である

「どうだろ？ワイズさん、たまに連絡つかないことあるし……
・こんなことなら今日の朝、聞いておけばよかったかな」

「別にいいわよ。とりあえず連絡ついたら、教えてくれればいいし」

「うん」

場所は変わって私立聖祥大付属小学校

「この前みんなに調べてもらった通りこの町には沢山のお店がありましたね」

黒板に簡単な町の地図を書きながら教えている優しそうな女性の先生

なのはとすずかはその話をしつかりと聞いている

が、アリサは暇なのかノートに何かを書いている

授業の内容を書いている。のではなく、NNN<NNNやらNNNN<横N CSやら英字や記号が書かれていた

恐らくはゲームでのワイズ用の何かを考えているのだろう。・・・授業はいいのだろうか？

昼休みになりなのは達は屋上でお弁当を食べていた

「将来かあゝ・・・アリサちゃんとすずかちゃんはもう結構決まっているんだよね？」

なのはは先ほどの授業の終わりに先生が言っていた将来の仕事について考えていた

「ウチは、お父さんもお母さんも会社経営だし、一般勉強してちゃんと後を継がなきゃ・・・ぐらいだけど」

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいなって思ってるけど」

「そっか・・・・・・2人共凄いやね」

小学3年生の会話ばくない会話をする3人

もしワイズがこの場にいたら、なんと言っただろうか？

「でもなのはは喫茶翠屋の2代目じゃないの？」

「うん・・・・・・それも将来のビジョンの1つではあるんだけど・・・やりたいことは何かあるような気もするんだけど、まだそれがなんなのかはつきりしないんだ」

なのはは少し落ち込みながら話を続けた。というか、小学3年ならば、そのくらいが普通だと思うのは作者だけだろうか？

「私、特技も取り柄も特にないし・・・」

「バカちゃん!!」

アリサは突然なのははに向けてレモンを投げ、なのはの頬に命中した。食べ物を人に向けて投げたはいけません。食べ物人を人に向けて投げたはいけません。大切なことなので2回言いました

「自分からそう言うこと言っんじゃないのっ!」

「そうだよ。なのはちゃんにしか出来ないこと、きつとあるよ」

「大体あんた理数の成績はこのあたしよりいいじゃないの!」それで取り柄がないとか……どの口が言うわけ?」

「あっ……」

アリサはなのはに飛びかかり後ろからなのはの口の端を引っ張った

「にやめて〜らって……なのは文系苦手だし……体育も苦手らし」

引っ張られながら話すアリサとなのは。なんとも器用である

「2人ともダメだよ!!ダメったら」

すずかは二人を制止しようとする。が、この場合、アリサを止めるのが手っ取り早いのではないだろうか?

「ねえ、ねえってば!」

いつの間にか、3人の周囲には人が集まってきており、そのことに気がついた3人は顔を赤くした

その頃、ワイズはとゆうと……

「お待たせしました。オリジナルブレンドコーヒーです」

「ワイズさーん。注文お願いしまーす」

「はい。少々お待ちくださーい。すぐ参りまーす」

喫茶翠屋でウェイターをしていた

仕事終わったらケーキ貰えるし、張り切らないとなー!あいつらの土産を金かけずにゲットできるのはありがてえ

働く理由としては、誉められるものではないようだ………

無印編第1話（後書き）

死食經典義「今回はこんな感じです」

ワイズ「こんな感じも何も、本編の1話の半分くらいじゃねえかよ。いいのか？こんなんじゃ読者なくなるぜ？」

死「しゃーないやん。本編の内容うる覚えになりかけてて、見直そうとDVD探してもなかなか見つからないわ、レンタルしてるところ見つけてもレンタル中だわで、見直すのに時間がかつたんだもん」

ワイズ「だもんゆるな、きもい。怖気が走る」

死「うわぁーい。自分のキャラにボコボコに言われてるよ、俺」

ワイズ「こんな作者だけだよ、見放さないでやってくれや。感想とかが待ってるぜ」

死「そのところは丁寧語で言おうよ!？」

無印編第2話（前書き）

死食經典義「予定より1日遅れちゃったけど、無事更新!!」

ワイズ「そーそー。そーやってちやとこっちもやればいいんだよ。
アホ」

死「この調子で!とはいかないけど、1週間に1回は更新したいねえ」

無印編第2話

「ほら、こっちこっち・・・・・・・・ここを通ると塾に行くのに近道なんだ」

学校の帰り道、アリサがそんなことを言って、突然走り出した

無論、なのはとずかにはアリサを追いかけた

アリサは公園に入り、その横道を指差した

「ここよ、ここ」

「そうなの？」

「うん、ちょっと道悪いけどね」

その道をアリサを先頭にして進んでいく3人

この3人の中で先陣を切るのは殆どの場合でアリサだ

それになのはとずかがついて行くのが恒例となっており、今回もその形になったようだ

その道を歩いている途中、なのははあることに気がつき、足を止めた

「あっ！・・・」

ここ、タベ夢で見た場所・・・・・・・・？

「どうしたの？」

「なのは？」

急に足を止めたなのは不思議に感じたのか、アリサとすずかが声をかけた

「あ・・・ううん。なんでもない！！ごめんごめん」

まさかね・・・

先ほど感じたことを気のせいだとしたのは、先に歩いていたアリサとすずかを走って追いかけた

そしてその道をさらに進んでいると・・・

（たすけて・・・）

突然聞こえた声になのは足を止め、それに気がついたアリサとすずかも足を止めた

「なのは？」

「・・・今、何か・・・声みたいなのが聞こえなかった？」

「声？別に・・・」

「聞こえなかった・・・かな？」

3人は辺りを見渡し、なのはが聞こえた声のようなものを探した

その時、再度その声がなのはに届いた

（助けて！！）

今度ははっきりと聞こえた声。なのははその声が聞こえた方向に走り出した

「なのは！！」

「なのはちゃん？」

2人を後ろに置き去りにし、なのはは声の元に急いだ

「たぶん、こっちの方から………あっ！」

そして、なのはは少し走った先の道の真ん中に、1匹の動物が蹲っているのを見つけた

なのはは急いで駆け寄りフェレットの近くにしゃがみ込んだ。それに気がついた動物は傷付いていたが顔を少し上げなのはを見上げた

同時刻

「確か……この辺りだった気がすんだけど………？」

なのは達が歩いているのと同じ道を反対側から歩いているワイズがいた

彼がここにいる理由。それは昨夜はゲームに熱中していた為、思いっきり無視していた声のことを翠屋の手伝いの後に思い出した為だ

次元犯罪者を追ってきて返り討ちにあつた管理局員とか、次元漂流者とかの可能性もあるしなあ・・・

「声の質からして、坊主ぽかったな。見つけたら管理局員がいるかどうかの星に強制転送だな」

（ワイズー、ちょっとくらいは傷の手当てくらいしたら？）

「却下、否決、不採用。理由はめんどー、以上」

一体誰と話しているのだろうか？

ワイズは道の左右を見ながら、ゆっくりと歩いていた

さつき、微かに『助けて』っーのが聞こえたんだよなあ・・・へたしたら聞こえてた地元住人が、念話を飛ばした馬鹿を見つける可能性もあるってことに気がつくのか？

かくいうワイズはなのはと士郎に魔法の存在をばらしている。口止めしているから問題ないとは本人の談

（助けてー！！）

ワイズの耳に今までよりも強く助けを求める声が聞こえた

「ちっー！！ホントにバカか！？コレだけ強く念話を飛ばすなんてよおー！！」

（ほんと、バカだね。もし敵がいたら見つけてくださいっていつて
るようなものだよ？）

「それで、念話の出場所は判ったか？」

（この道を真っ直ぐ。でも、同じ場所に3人ほど人が向かってるよ）

「っ！？急ぐぞ！！」

見つけたら即座に回収して、「魔法文化が無い場所で不特定多数
に向けて念話を飛ばしました」って紙を貼っ付けて、管理局本局に
転送^とばしてやる！！鉢合わせするのが次元犯罪者ならそいつらもま
とめて送ってやる！！

「……鬼か、こいつは？」

ワイズは道の悪さを感じさせない速度で、念話の発信位置へと疾走
した

「そろそろ着く………っ！」

ワイズは念話の発信位置に人影があるのを確認すると、即座に茂み
に身を隠し、様子を窺い始めた

「……ちょっと待て？あれって、聖祥付属小の制服じゃね？」

「と、とりあえず病院！！」

「獣医さんだよ！」

「えっと・・・この近くに獣医さんってあったっけ」

よりにもよってなのはちゃん達3人組かよ・・・・・・・・（周囲に魔力反応はあるか？）

（んゝちょっと待って・・・・・・・・今のところは反応なし。それと、なのはちゃんが抱いてる動物が念話を出してみたいだよ）

（ん、わかった）早いとこ、こっから移動させるか

ワイズは茂みから音も無く出ると、何事も無かったかのようになのは達のそばまで行った

「おい、なのはちゃん達。こんなとこでどーした？」

「あ、ワイズさん！」

なのは達はワイズが先ほどまで茂みにいたことを知る由も無く、怪我をしている動物を見つけた経緯をワイズに説明している

ワイズは話を聞きながら、なのはの腕にいる動物を、正確にはその動物がつけている赤い珠を見ていた

こいつはデバイスか？それに・・・管理局にこんな小動物の魔導師なんていたか？

「そうだ！この近くの獣医さん知ってる！？」

「ああ、知ってるぜ。そいつを連れてくんだろ？付いてきな」

ワイズはそういうと、なのは達を連れてその道に戻っていく

なのはは腕に抱いている動物を心配そうに見つめ、すずかも同じ視線を動物に向けている

アリスも動物が心配で、2人と同じように視線を向けていたが、不意にワイズに視線を向けた

「そーいえば、なんであんたがここにいるのよ」

「あ？翠屋の手伝い終わったんで、珍しく散歩しようかと思ってな。なんとなく公園に向かっていたら、お前たちがいたって訳」

ホントは念話を聞いたからだ・・・なんていえる訳ねーしな

とっさに出た言い訳だが、アリスは信じたようだ

「ほんと、珍しいわね。普段のあんたなら直でゲームセンターなのに。でも、助かったわ。おかげでこの子を獣医さんに見せれるもの」

「ふっ。俺の気まぐれに感謝しとけ」

「はいはい」

ワイズとアリスは軽口を叩きあいながら、なのはとすずかは怪我をしている動物の様子を看ながら動物病院へ歩いていった

その夜、高町家の夕食前、なのはは怪我をした動物・フェレットの話を家族にしていた

「でね、そのフェレットさんをしばらくウチで預かる訳にはいかな
いかなあゝって」

「んゝ・・・フェレットか・・・・・・・・・・」

士郎は腕を組み考え出した

そんな士郎をなのはは期待と不安が混じった目で見つめた

「ところで何だ？フェレットって？」

そんな言葉が出てきて、それを聞いた高町家の3兄妹はガクツと姿
勢を崩した

「イタチの仲間だよ、父さん」

「だいぶ前からペットとして人気の動物なんだよ」

フェレットがなんなのか知らない士郎に恭也と美由希がどんなモノ
なのか簡単な説明をした

そこに料理を持ってきた桃子がやってきて、その会話に加わった

「フェレットってちっちゃいわよね？」

「知ってるのか？」

無論、知っているからこそその先ほどの台詞だ。よって、フェレット
のことを知らなかったのは士郎だけだったという事である

「ん〜と・・・これくらい」

なのはは自分の肩幅くらいまで手を広げた

「しばらく預かるだけなら・・・籠に入れておけて、なのはがちゃんとお世話出来るならいいかも。恭也、美由希どう？」

なのはが示した大きさを見た桃子はそう言っ、恭也と美由希に賛否を尋ねた。士郎には聞いていなかったりする

2人は反対はないと言い、それを聞いた士郎は頷いてなのはに許可を出した

「うん！ありがとう！！」

なのはは許可が出たことにとても喜び、満面の笑みを浮かべた

食事が終わると、なのはは自分の部屋に戻り、アリサとすずかにメールを打っていた

「送信つと」

送信を終えたなのはは、携帯を閉じて充電器へと差し込んだ

その直後、周囲から変な音が聞こえ出した

不思議に思ったなのははその音をよく聞こうと目を閉じた。すると・

（聞こえますか？僕の声が？聞こえますか？）

声が聞こえ、なのはの脳裏に赤い宝石が浮かん

「これって夕べの夢と昼間の声と同じ声・・・」

聞いたことのある声。なのはは日中に助けたフェレットのことを思い出した

（聞いてください！！僕の声が聞こえるあなた！！お願いです！！僕に少しだけ力を貸してください！）

（あの子がしゃべってるの・・・？）

（お願い！！僕の所へ！！・・・時間が・・・危険な・・・
・・・もう・・・）

もう・・・なんだろうか？最後の部分がかなり聞き取りにくかった。そしてその声は聞こえなくなった

声が聞こえなくなると、なのははふらふらとベットに倒れこんだ

同時刻、自宅であるライトノベルを呼んでいたワイズにもなのはが聞いた声が届いていた

「・・・しまった・・・あの小動物のことすっかり忘れてた・・・」

動物病院へと動物を連れて行ったはいいが、魔法を知らないアリサ

達がいたため強制転送が出来なかったのだ

しかも、明日様子を見に行くことになってしまった為、ワイズは様子を見ることにしたのだが・・・その帰りに買ったライトノベルに集中してしまい、動物のことを完全に失念していたのである

「これだけはつきりと聞こえる念話を不特定多数に飛ばす・・・
・なのはちゃん達の誰が念話に反応したのか知んねえけど、絶対に誰か向かうだろーな・・・」

（あの3人の中だと、なのはちゃんが一番資質あったから、多分なのはちゃんじゃないかな？それにもしかしたら、他にも声に反応した人がいるかも）

「ちっ！魔法文化の無いところで不特定多数に念話を飛ばすバカは賤けが必要だなあ！！」

その額には見事に#マークが浮かんでいた

ワイズは本を閉じて立ち上がって窓を開けた。そして、窓のふちに足を乗せた

外からひんやりとした風が吹き込み、バタバタとカーテンをなびかせた

ワイズは徐に外を見渡した。近くには誰もおらず静まりかえっていて、空には星が美しく輝いていた

「さて・・・運のいいことに誰もいない。絶好の出撃状況ってやつだな」

（だね 進路オールグリーン、発進どうぞ！）

「ワイズ・カオストーン、バカを撲滅する！！」

ワイズは窓のふちを踏み台にして、外へ飛び出した

・・・が、ここで一つ問題がある。ワイズの自宅はマンションの10階にある。その窓から飛び出したらどうなるか。答えは『落下』だが、ワイズは飛び出すのと同時に飛行魔法を展開。少しも落ちることなく夜空へと飛び立った

夜空高く飛ぶワイズは一筋の流れ星のように、星々の間を抜けて行った

その夜、海鳴市内では多数の人が流れ星を見た翌朝の話題になることはワイズの知るところではない

「あ、流れ星や。体がよくなりますように……………」

ある少女がそんな願いをしていたことも、今は語ることはないだろう

（お願い……………届いて……………）

動物病院の籠の中から念話を飛ばしていたフェレットは、自分がいる籠を影が覆ったことに気がついた

その影の方を見ると、以前逃がしてしまった黒い生物がいた

「グオオオオオ・・・」

フェレットはすぐに行動できるように身構えた

その頃、なのははフェレットを預けた動物病院へ向かった走っていた

そして動物病院の入り口に到着したとき、再びなのははを耳鳴りが襲った

ハウリング音のような音。その音なのはは思わず耳を塞いでしまった

「また、この音・・・」

その眩きに反応したかのように、突然音がやんだ。そしてその代わりに周囲の風景の色が灰色のような色になっていた

その周囲の様子になのはは一瞬戸惑ったが、すぐに病院内に向かうとした

その時、病院の窓からフェレットが飛び出してきた

「あ！あれはっ！！」

なのははすぐにそちらに視線を向ける。そこには逃げるフェレットとそれを追う黒い生物がいた

フェレットは近くにあった木の根元へ逃げるが、黒い生物は木のこなどまるで介せず突っ込んだ

その衝撃で木は倒れ、フェレットは宙へと舞い、なのはのいる方へ吹き飛ばされた

それを見ていたなのはは、思わず両手を伸ばした

フェレットは宙で体勢を直し、広げられた腕の中へ飛び込んだ

キャッチした際、衝撃が大きかったためか、なのははしりもちをついてしまった

「なっ・・・なにに！？一体なに！？！？」

目の前で起こっている光景に、なのは思わず叫んでしまった

そこに追い討ちをかけるかのように、フェレットが喋りだした

「来て・・・・・・・・くれたの？」

「しゃべったっ！！？？」

フェレットが喋ったことに驚いたなのははフェレットを膝の上に落としてしまった

まあ、当然だろう。普通、動物は喋らないのだから

「グオオオオオオオオ・・・」

そんななのはの前で黒い生物がまた動き始め、なのはに向かって突っ込んできた

「きゃああああ!!」

なのは目を強く閉じ、すぐに来るであろう衝撃に身を硬くしたが、いくら待っても衝撃はこなかった

恐る恐る目を開けると、そこには黒い生物を片手で受け止めているワイズがいた

「大丈夫か、なのはちゃん？」

「ワイズさん!!」

ワイズはなのはの様子を見て、大丈夫そうだと安心した

「グオオオオオ・・・!!」

黒い生物はワイズごとなのはを吹き飛ばそうとしているようだが、ワイズはピクリとも動かない。それでも黒い生物は前に進むうっている

「てめーはちょっと離れてろや!!」

ワイズは黒い生物を押さえたまま体を捻って回し蹴りを喰らわせる

その威力に黒い生物は吹き飛んで、塀に叩きつけられた

さらにワイズは黒い生物に人差し指を向ける

ワイズの指先が光り、宙に円を描き始める。すると、他の場所からも光が現れ、一瞬のうちに魔方陣が作り出された

「んで・・・こいつはついでだ！求めるは雷鳴くくく稲光！！」

ワイズが叫ぶと、魔方陣から一筋の稲妻が放たれた

稲妻は一直線に黒い生物まで飛んでいき、命中した

「ぐおおおおおおおおおお！！！！」

黒い生物は大きく吼え、その場にうずくまった

な・・・なんなんだ、今の魔法は！見たことの無い魔法陣だ！それに、この人は一体・・・

ワイズの放った魔法を見たフェレットは、未知の魔法を使うワイズに体を強張らせた

ワイズはそれを見ていたが無視してなのはに話しかけた

「なのはちゃん、走れっか？」

「あ、はい！」

「取り合えずこっから移動するぞ。あと小動物。きっちりしつかり説明をして貰うからな！それが終わったら厳しく凶育してやるから覚悟しとけ！！」

「うえっ！？小動物ってばく！？それに教育の文字がなんか違う！

「？」

このフェレットとの出会いが、高町なのはのこれからの運命を大きく変えることになること、今この場にいる3人は思いもしていなかった

無印編第2話（後書き）

死食經典義「まずは感想のお礼から！UNCLE SAMRAI MASTER様、天意無法の歌武鬼者 鬼龍院獣侍郎様、感想有難う御座います！」

ワイズ「んゝ名前がなげえ・・・縮めていいか？」

死「こら！失礼なこと言わないの！！」

ワイズ「ちっ・・・」

死「と、ここで今回ワイズが使った魔法について触れてときましよう」

求めるは雷鳴くくく稲光

富士見ファンタジア文庫出版のライトノベルで、鏡貴也先生の作品の伝説の勇者の伝説シリーズに出てくる魔法の一つ。魔方阵から雷撃を放つ。ワイズが使ったのはその再現。ワイズが持つ強大な魔力をつぎ込めば、本物の雷を凌駕する威力にすることも可能

死「こんなとこかな」

ワイズ「あれは使いやすいぜ。ネギまの奴だと威力ありすぎてよー。読んですぐにプ「ストップ！！」・・・んだよ」

死「それはまだ秘密のアツコちゃん！」

ワイズ「とりあえず、くだらねえギャグを言ったためーには凶育だ

な」

死「うえっ!?!」

ワイズ「黄昏よりも暗き存在、血の流れより紅き存在、時の流れに埋もれし偉大なる汝の名において、我今ここに闇に誓わん、我等の前に立ち塞がりし全ての愚かなるものに我と汝の力もて、等しく滅びを与えんことを!竜破斬!!!」

死「ちょ、おま、ぎゃああああああ!!!!!!!!」

ワイズ「んじゃ、そーゆーことで、またな」

無印編第3話（前書き）

ワイズ「前回の更新から大体1ヶ月ってーとか。遺言はあるか」

死食經典義「遺言はないけど、いい訳ならある！」

ワイズ「えばんじゃねーよ！」

死「詳しくは後書きで」

無印編第3話

動物病院にいた黒い生物から距離をとるために走っていたワイズ達
2人と1匹

ワイズはなのはのペースに合わせている為、なのはは息切れをすることもなく走っていられた

「えつとその・・・なにがなんだか良く分からないけど・・・一体なんなの？何が起きてるの？」

なのはが腕に抱えているフェレットに問いかけた

それはそうだろう。いきなり頭に声が聞こえ、その声の下に行ってみると見たことも無い生き物がいて、周囲を破壊していたのだから

「君には・・・資質がある。お願い、僕に少しでも力を貸して」

「資質？」

フェレットはなのはの疑問に対し、まともな回答をしないで、訳の分からないことを言い出した

ワイズは何も言わずに黙ってその話を聞いている。普段のワイズなら即座に突っ込み、言葉で捻じ伏せているのだから、ちょっと不気味だ

「僕はある探し物の為にここではない世界から来ました。でも・・・僕1人の力では想い遂げられないかもしれない！！だから・・・」

・迷惑だと分かってはいるんですが・・・資質を持った人に協力してほしくて・・・」

フェレットはなのはの腕から飛び出し、地面に降りてさらに続けた

「お願いします！！お礼は必ずします！！僕の持っている力を、あなたに使ってほしいんです。僕の力を・・・魔法の力を！！」

「魔法・・・？ワイズさんみたいなの？」

なのはは思わずワイズを見上げた。なのははワイズが魔法使いだと言っていたことと目の前で魔法を使ったのをしっかりと覚えていた

ワイズはなのはの頭を撫でた。撫でられているなのはとても気持ちよさそうに目を細めている

「ま、この小動物が言ってる魔法と、俺の魔法は別物だな。まずそれが1つ」

「別物なの？それに1つって？」

「聞いてりゃわかるよ。んで、2つ目。小動物、なのはちゃんの疑問に何故ちゃんとした回答をしない。相手の疑問を無視して話を進めるのが礼儀か？あ？」

「す、すみません・・・」

ワイズはフェレットに思いっきり顔を近づけて話している。笑顔だが、その後ろには般若や夜叉の面が見えている

「最後に3つ目。1人だと無理臭いから迷惑なのはわかってるけど資質を持った人に手伝って欲しい？御礼は必ずする？はっ！馬鹿言ってんじゃねえーよ。1人で難しいなら、増援を頼むなり、始めから複数で来てれば良かったんだよ。それに迷惑をわかってるなら、始めから無茶苦茶に念話なんぞ飛ばすな。それに反応してアレがきたんだろーが。なのはちゃんよりも小さい子供だったらどーすんだコラ。しかもお礼は必ずするだろー？金くれならまだしも、仮に誰かを殺してとか言われたらどーすんだよ、てめーは？ああ？」

一息にワイズは喋りきった。そして、自分のとった行動の迂闊さに気がついたフェレットは頭を下げた

「・・・ごめんなさい」

「ごめんですんだら、管理局はいらねーよ、阿呆」

そのとき「グオオオオ」と、先ほどの黒い生物の声が2人と1匹の耳に聞こえた

声のした方向、上空を見上げるとその生物が口を大きく開けて落下してきていた

しかもその生物は先ほどのものとは違い、頭が2つ増えて3つ首になっっていた

「っ！?!?!?」

なのはは目を見開き固まってしまった

「ぼさつとすんな!」

ワイズはなのはを突き飛ばしてその射線上から避けさせ、自身もなのはの反対側に回避した

「そんな・・・僕が見つけたときは1つだったのに・・・いつの間に2つ取り込んだんだ!？」

「んなこたーどーでもいい。おい小動物!アレ、消してもいいのか?一瞬で抹消できるんだが?」

地面に激突し、もがいている生物を見ながらワイズはフェレットに聞いた。どうやら黒い生物を消し去るつもりのようなようだ

そんなワイズの問いにフェレットは焦ったように言った

「だ、駄目です!アレは膨大な魔力の塊の思念体なんです!下手すると、周囲一体を巻き込んで爆発の可能性もあるんです!!!」

「・・・じゃー封印か?でも俺封印苦手なんだよな!。下手したらここら辺全体更地になるかも」

「・・・僕に考えがあるので、その足止めをお願いします・・・」

「はいよ」

ワイズは今だもがいている生物に近寄り、その体に腕を回した

「せーのっ!」

「グオオ！？」

ワイズは生物を持ち上げ、更に天に向かって放り投げた

「・・・・・・・・・・」

その光景になのはとフェレットは口大きく開けてしまった

ワイズはそんな2人に言った

「んじゃ、ちよつと空で遊^{うえ}んでるから。小動物、その間にてめーの考え実行しとけ。ろくでもねー考えだったら、後で折檻だ」

「上？」

「うえっ！？」

ワイズは上空に投げた生物に向かって跳躍。その勢いのまま蹴りを放った

「グオオ！！」

その衝撃で生物は更に上空に上がり、ワイズは足場でもあるかのよう^うに宙を蹴って追撃。それを繰り返し、かなり上空まで行ってしまった

「・・・・・・・・・・はっ！？こ、これを！！」

フェレットは首下に下がっている赤い宝石を口で取り、なのはに渡した

「暖かい・・・」

その宝石を手にしたなのは、それから伝わる暖かさを感じた

「それを手に目を閉じて心を澄まして！！そして僕の言う通りに言
つて！！」

なのはは宝石を握り締め、フェレットを見つめた

「いい？いくよ！」

「うん！」

宝石が鼓動し、周囲が静まり返った

「管理権限、新規使用者設定機能・・・フルオープン」

フェレットの言霊に宝石が答え、地面に魔方陣が浮かび上がった

「繰り返して・・・風は空に、星は天に」

「風は空に・・・星は天に・・・」

「不屈の心はこの胸に」

「不屈の心はこの胸に」

宝石の鼓動が早くなり、それを握り締めているなのはの手の中で輝
きだした。その光は鼓動と共に宙へと広がっていく

「この手に魔法を」

「この手に魔法を！」

なのはは宝石を掲げる

「レイジング・ハート！セーリットアップ！！」

「Stand by Ready・Set up」

宝石、レイジングハートがさらに光り輝き、天に向かってピンク色の光が雲を消し飛ばして天へと伸び上がった

「なんて、魔力だ・・・」

天に伸びたのはなのはが持つ魔力。その魔力の柱を見たフェレットは思わずそう呟いてしまった

だが、当の本人はそんなことなど知るはずもなく、ただあたふたとしていた

「え？ええ！？」

「落ち着いてイメージして！君の魔法を制御する魔法の杖の姿を！そして君の身を護る強い衣服の姿を！！！」

「そんな！？急に言われても・・・えつと・・・えつと・・・えつと」

このフェレットは本当に何を考えているのだろうか？訳の分からない

い状況でその様なことを言って、余計に混乱させたいのだろうか？

「Please settle down．May I select shape and decoration the carrier Jacket and Device based on your image」(バリアジャケットとデバイスはあなたのイメージに基づいて、こちらで最適化します)

「わたしのイメージ……とりあえず、これで！」

どうやらイメージは固まったようだ

「All right．Stand by Ready」

レイジングハートの声で、なのはの姿が光の中に消える

宝石は巨大化し、何処からともなく現れた金属製のパーツが次々と接続されていく

そしてなのはの衣服が消え、代わりに光がなのはの体を包んでいく

一瞬の時間でそれらのことが行われ、光が弾けると姿を変えたなのはがいた。弾けた光りは鳥の羽の形となって辺りに飛び散った

「成功だ！」

ここで、なのはがどのようなイメージをしたのか説明しておこう

なのはの脳裏に浮かんだイメージ。魔法の杖はワイズと一緒にやったゲームに出てくる魔法使いが持っていた杖を思い浮かべ、衣服は

聖祥大付属小の制服を思い浮かべた。ただ、その時なのはもう一つワイズと一緒に見たアニメ、機動戦士ガンダムW —Endle^{エン}ドレスワルツの主人公機、ウイングガンダムゼロカスタムも何故か思い浮かべていた

そして今のなのはの姿はというと・・・杖はなのはがイメージした魔法使いの杖の素材を金属にした形になっている。バリアジャケットは聖祥大付属小の制服の細部をいじったモノになっていて、腕にはウイングゼロカスタムのアームカバーを簡略化したものが付き、背中には同じくウイングゼロカスタムの羽を小さくしたアクセサリが付いている

「ふえ？ええええっ！？」

なのはは自分の姿が変わっていることになんか驚いている

成功したことに喜んでいるフェレットと何がどうなっているのか分かっていないなのはの間に、何かが落ちてきた

「これって・・・さっきの黒いのかな？」

その何かは、黒い生物の体の一部だった

その生物の一部を見ていたなのは達に上空から声が届いた

「そこどけえー！離れろおー！！」

上空から聞こえたワイズの声になのはは上を見上げた

そこには黒い生物がなのは達目掛けて落ちてきていた

「わわ・・・わわわっ!？」

なのはは急いで落ちてくると思わしき場所から移動した

その数瞬後、なのはが先ほどまで立っていた場所に黒い生物が落下。その上にワイズが思いっきり踏みつけるように落下してきた

「さて、小動物。準備は出来てっか？」

「・・・・・・・・・・は、はい」

思いもよらぬ再登場の仕方に固まっていたフェレットだったが、ワイズの問いには反応できた

「んで?どーやって封印すんだ?てめーは今魔力空に近い状態なんだろう?」

「え、ええ。なので、現地協力者の力を借りて、ひい!?!?」

フェレットが現地協力者と言った瞬間、ワイズは再度般若の笑顔になった

「あんなー、小動物。俺は言ったよな。ろくでもない方法だったら、折檻だつてよ」

「ひい!?!?で、でも、今はコレしか方法が!」

「後で折檻な。答えは聞いてない」

「そんな理不尽な!？」

ワイズは有限実行をする、間違いなく、絶対に

フェレットはワイズを見て反論をしようとしたが、笑っていない笑顔を見てガタガタと震えだしてしまった

そんな様子のフェレットを見たワイズは、溜息を吐きながらのはに聞いた

「おつと?」

そんなコント紛いの事をしていたせいだろうか。黒い生物はワイズを振り落として上空へを飛び逃げた。そして、ワイズ達の様子を窺っている

ワイズはそれを横目になのはに問いかけた

「んで、なのはちゃん。封印、出来そうか？」

「えつと………わかんない？」

「How much do you know about magic?」(魔法についての知識は?)

「ワイズさんが使っているの以外見たことはありません!」

魔法文化がない世界の住人に、魔法についての知識を求めるのは、おかしいことではないだろうか?なのははワイズという存在がいたから魔法を見る機会は多々あったが、ワイズは魔法については何も

教えていない

ワイズは後に教えなかった理由について、「俺教えるの下手、つかめんどーだった」と語っている

「Than, I teach you everything. please do as I say」(では、全て教えます。私の指示通りに)

「は、はい！」

「デバイス！なのはちゃんは任せたぞ！もし何かあったら、無茶苦茶に弄繰り回してやるからな！！」

「Yes sir」

黒い生物はワイズ達に目掛けて急降下してきた

ワイズはその場に飛び上がり回避。なのはは後ろへ飛んで、そのまま空へと飛び上がってしまった

「えええええっ！？」

飛べるようになっていと思っていたなのはは、何度目になるかわからない驚きの声を上げた

そんななのはに狙いを定めたのか、生物は体のあちこちを槍のように伸ばし、攻撃を仕掛けた

「Flyer fin」(飛びます)

「あわ！あわわわわ！？」

なのはは自分に向かってくる攻撃を、なれない飛行で不恰好になりながらも避け、避けきれないものはレイジングハートがプロテクションを張って防御した

生物はなのはに対する攻撃の手を休めず、宙に浮かび上がり連続でその身を伸ばした

だが、なのはは民家の屋根を跳ねるように飛びながら攻撃をかわした

「こつちにもいるってこと、忘れてるんじゃないよ！」

なのはは対してしか攻撃をしていなかった生物にワイズは接近し、拳を振り上げた。その振り上げた拳、いや腕全体が黄色い装甲に覆われていた

「衝撃のお・・・ファーストブリットオオオッ！！」

「グオオオオオ！？」

ワイズの放った一撃は黒い生物の体へ深々とめり込んだ

その衝撃は凄まじく、地面にいたフェレットのところにも届いたほどだ

そんな一撃を喰らった生物は勢いよく吹き飛んだ

さらに強すぎる衝撃で生物の体は3つにわかれた

3つにわかれた生物は空中で姿勢を直し、家屋の屋根に着地。そしてそのまま逃走を始めた

「あ！逃げた！」

『グオオオオオ』

生物は家屋の屋根を飛び跳ねるようにして逃げる

なのは飛び上がって追いかけるが、生物の移動速度の方がわずかに速く、追いつくことが出来そうもなかった

「追いつけない！あんなのが人のいるところに出ていたら・・・！？」

人のいる場所にこの生物が出た場合の被害は計り知れないだろう

だが、これらの生物は人前に出ることは出来ない

「自壊せよ、ロンダニーニの黒犬。一読し、焼き払い、自ら喉を掻き切るがいい。縛道の九、崩輪」

いつの間にか生物の正面に移動していたワイズが言霊を唱えると、指先から黄色い縄状の魔力が放たれて生物の体に巻きついた

「グオオオオ！？」

「そっちから喧嘩吹っかけてきたつーんだから、逃げんなよ。なあ？」

「ワイズさん！」

「お、来たかなのはちゃん。早速だけど、こいつらの封印頼むわ。俺封印苦手だからよ」

「よくわからないけど、どうしたら・・・？」

封印というものをどのように行えばいいのかわからないのはの真下にフェレットが来て、封印の方法を教えた

攻撃や防御は願うだけで発動するが、より大きな力を必要とする魔法には呪文が必要になること。心を澄まして、そうすれば心の中に自分の呪文が浮かぶということ

なのはは言われた通り、目を瞑り心を澄ました。そして自分の呪文が見つかったのか、目を開いた

「リリカル！マジカル！」

その呪文に合わせ、フェレットが封印対象の指定の言霊を言った

「封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！」

「ジュエルシード！封印！！」

なのはが高々を宣言すると、レイジングハートからピンク色の光の帯が伸び、3体に分かれていた生物に巻きついていく

「リリカル、マジカル！ジュエルシード、シリアル18！20！2

「1！封印！」

封印するシリアルナンバーを言うと、さらに光の帯が生物達に伸び、その体へと刺さっていく

そして、生物達は「グオオオオオ・・・」という断末魔を残し、消滅した

「やった！」

フェレットは封印が成功したことに喜びの声を上げた

ワイズは、そんなフェレットを無言で持ち上げた

「さっき言ったよな？ろくでもねー方法だったら折檻だって・・・よぉー！」

「え？なに！？」

「魔法文化のない世界の住人に魔法を使わせせんつーの！！なあ！！！」

「いだいだだだだだだだだだだだっ！！！！！」

ワイズは雑巾を絞るように、フェレットを捻っていた

「しかも、貴様はのほほんと見てるだけだろ！？デバイスを渡して、はい、お仕舞いつてか？あゝ！！！」

「ま、魔力が枯渇してて・・・」

「答えは聞いてない!!」

「そんな理不尽な、いだだだだだだ!! やめっ、ほんと!? 痛く
い!?!?」

動物虐待にも等しいことをしているワイズをなのは黙って見ていた

ワイズさん、楽しそうなの

黙って見て、頭ではそんなことを考えていたようだ。しかも、フェ
レットを助ける気配もないのは如何なものだろうか?

そんななのはにフェレットは視線を向けて助けを求めた

「た、たたた、助けてええ!!」

「それは無理なの。ワイズさんは言ったことは絶対するから・・・
諦めて?」

「そんなあゝゝゝいた、いたただだだだ!!」

フェレットの体が捻じ切れないことを祈ろう・・・・・・・・

無印編第3話（後書き）

死食經典義「まずは言い訳から」

ワイズ「遺言だな。言ってみろ」

死「web恋姫無双のプレオープン テストをやってた！」

ワイズ「……ほう？勿論、孫呉所属だろーな？それ以外だったら……死ぬぞ？」

死「勿論孫呉に決まってるでしょうが！雪蓮と祭は俺の嫁！」

ワイズ「俺の嫁だ！ざけたことこと抜かすっーんなら、ツブスぞ」

死「……まあ、そんなこんなで、こっちが出来なかったのよ。ある程度放置できる状況になってきたので、こっちに戻ってきた」

ワイズ「ま、チマチマ更新してけよ？じゃないと、そのうち読者に殺されるんじゃない？」

死「ガクブルガクブル……」

ワイズ「っと、今回は俺のステータス紹介の予定だ。その後に本編に戻るんですよ」

死「しかし、3話かけて1話と2話途中ってのは遅いかな？」

ワイズ「知らん。劇場版のDVDレンタル出来たから修正するつー
たのはお前だろーに。遅い遅くないは読者にでも聞け、阿呆」

ステータス情報（前書き）

死食經典義「今回はワイズのステータス情報を公開します」

ワイズ「公開早えーな」

死「元々ステータスとかは作ってあったから、それを使っただけだしねー」

ステータス情報

死食經典義（以降「死」）「えー今回はタイトル通り、今現在のワイズのステータス情報の公開になります」

ワイズ（以降「ワ」）「プラバシーの侵害で訴える前に消すぞ？」

死「あと、今回は本編で自分が魔法を使えるようになったばかりのなのはちゃんにもご登場していただきます！」

ワ「無視か？」

なのは（以降「な」）「よろしくお願いします」

死「礼儀正しいなのはちゃんには、飴をあげよう」

な「ありがとうなの」

ワ「んで？^{しゅごじやん}極限馬鹿駄目作者YOO。俺の情報公開って何処までやんだ？本編未登場のもいろいろあんだけどよー」

死「無論、公開しても問題ないところまではだす！」

ワ「あっそ」

死「未登場は、出てきたときの後書きで公表の予定だし」

な「でも、作者さん忘れっぱいから忘れちゃうんじゃない？」

死「グハアッ!？」

ワ「はっ!なのはちゃんにまで言われるよーじゃ、ホント駄目だな
デメー」

死「・・・いい感じにダメージを受けたところで、基本ステ
ータスを開示に行きましょう・・・」

クラス：ウィズ・カオストーン

マスター：なし

真名：混沌の賢者の石

性別：男性

身長・体重：189cm 64kg

誕生日：不明

血液型：不明

イメージカラー：銀

CV：小山力也様

特技：観察、記録

好きなもの：可愛いもの、萌えるもの、成長するもの、自分の悪を
認識している者

苦手なもの：生意気な男、成長しないもの、絶対正義を掲げるもの

属性：混沌・善

筋力：C

魔力：EX

耐久：EX

幸運：B

敏捷：B

宝具：EX

クラス別能力

不老不死：EX 呪詛や吸血鬼が保有する不老不死よりもレベルの高い不老不死。どんなに傷を被うとも、元の状態に戻る世界の修正に近い。ほんの僅かでも欠片、1本の髪の毛や1滴の血でも残っていれば、蘇生可能。石に貯蓄されている魂のストックがなくなった場合発動しなくなる

保有スキル

陣地作成：E 自分に有利な陣地を作り上げる。ワイズの場合は自分が住みやすい部屋を作る程度しか出来ない

黄金律：A 体の黄金比ではなく、人生において金銭がどれほどついて回るかの運命

吸収同化 対象の魂と魔力を自らのうちに取り込み、自身の一部とするもの。相手の同意、もしくは相手が死ぬ直前でなければ使えない

宝具

混沌の賢者の石：ワイズ自身がなっている《混沌の賢者の石》。無限の魔力と不老不死を与える古より伝わるロストロギア。管理局ではもつとも危険なロストロギアとして指定している

七大罪：嫉妬、色欲、暴食、強欲、怠惰、憤怒、傲慢の7つからなる人間がもつ大罪の名を冠する7つの能力。1つ1つの能力が強すぎる為、ワイズ自身の手でランクダウンされているが、ワイズ自身でこのランクダウンを解除出来る。完全開放時（解除状態）では能力名が変化する

嫉妬 通常使用時・エンヴィー、完全開放時・？：自身の外見を変化させる能力^{スキル}。変化した人物や生物の能力を使うことが出来る。変身対象のDNA情報がなければその対象になることは出来ない。ワイズが変化対象者の魂を保持している場合、その魂を表に浮上させることで、その人物そのものになることが可能

色欲 通常使用時・ラスト、完全開放時・？：？？？

暴食 通常使用時・グラトニー、完全開放時・？：？？？

強欲 通常使用時・グリード、完全開放時・？：？？？

怠惰 通常使用時・スロウス、完全開放時・？：？？？

憤怒 通常使用時・ラース、完全開放時・？：？？？

傲慢 通常使用時・プライド、完全開放時・？：？？？

七美德：忍耐、純潔、節制、救恤、勤勉、慈悲、謙讓の7つからなる人間がもつ美德の名を冠する7つの能力。1つ1つの能力が強すぎる為、ワイズ自身の手でランクダウンされているが、ワイズ自身でこのランクダウンを解除出来る。完全開放時（解除状態）では能力名が変化する

忍耐 通常使用時・ペーシェンス、完全開放時・？：？：？

純潔 通常使用時・チェイスティティ、完全開放時・？：？：？

節制 通常使用時・テンペランス、完全開放時・？：？：？

救恤^{きゆうしゆ} 通常使用時・チャリティー、完全開放時・？：？：？

勤勉 通常使用時・デリジェンス、完全開放時・？：？：？

慈悲 通常使用時・カインドネス、完全開放時・？：？：？

謙讓 通常使用時・ヒューミリティー、完全開放時・？：？：？

ワ「……………いろいろ言いてーことがあんだがよお」

な「なんでF a t e / s t a y n i g h t風なの？」

死「なんとなく、その方が格好よさ気だったから」

ワ「なのはちゃんが言ったのが1つ。次に、なんで俺の名前がクラス名なんだよ？」

死「ワイズ・カオストーンで言うのは、アルハザードに付けて貰った呼び方でしょ？それに、混沌の賢者の石になった時点でお前は《混沌の賢者の石》って言うものになってるの」

な「????」

死「わかりやすく言うと、ペットの犬に名前をつけるのと同じよ。秋田犬と言う犬種にハチって名前をつける様なもんなの」

な「なるほど」

ワ「ほう。んじゃ、耐久、魔力、宝具のEXはどうしてだ？」

死「耐久は石による不老不死。魔力は同じく石による無限魔力。宝具も全部合わせたらランク外なので」

ワ「チートだな」

な「チートなの」

死「チートを作りたいからいいの！」

ワ「あとよー。宝具の七大罪と七美德、殆ど《????》になってんだが？」

死「それは、ほら。先に言っちゃったら面白くないでしょ？使った回の後書きにステータス情報の更新って形でアップするつもりだしね」

ワ「ほほう……」

な「きつと忘れると思うの」

死「忘れません！」

死「んじゃ、次行ってみよ」

な「ワイズさんのステータスはもう出したよ？」

ワ「なにすんだ、これ以上？」

死「ちょっとした裏話をね」

ワ「なに企んでんだか」

死「ワイズが生まれた経緯について、ちょっと触れておこうかと」

ワ「ほー。それは初耳だ。どんなんで俺の設定が出来たか話してみろや」

死「この始まりは《鋼の錬金術師》の賢者の石なのよ。アニメの最終回付近で、あれ？これ使えるんじゃない？ って思ったのが始まり」

な「ハガレンは感動だったの！」

ワ「確かに、賢者の石で繋がりはあるが・・・混沌とはなんの関係のねーだろ？」

死「まーね。俺もハガレンの賢者の石の設定でいこうと思ってたん

「ただ、それだと上限付いちゃうでしょ」

「ワ「そりゃそーだわな。あつちは無限に使えるって訳じゃねーし」

死「そんな時に目に飛び込んできたのが、漫画の月姫とヘルシング
！」

ワ「・・・おい、まさか・・・・・・・・・・」

死「月姫のネロ・カオスとヘルシングのアーカード。この2人の不老不死の概念っーかそんなん取り込んだら手に負えなくなるんじゃない。と思って設定を組んだのだ!!!!」

ワ「うわあ、なにこいつ・・・」

死「ネロ・カオスの不老不死の概念とアーカードの不老不死の概念を賢者の石に融合させたら、あら不思議。チートの完成でございます」

な「む、無茶苦茶な・・・」

死「不死の否定を喰らっても、世界の修正で元に戻る。直死の魔眼を使われて刺されても魂が1個消えるだけ!」

ワ「おい、直死でも無事なのはおかしいんじゃないか?」

死「《混沌の賢者の石》は複数の魂の高密度集合体の総称であって、概念じゃないのよ。魂の1つ1つが《混沌の賢者の石》なので、その全てを殺さないと死なない」

な「どーゆーことなの？」

死「例をあげるか。犬にも色んな種類がいるよね。チワワだったり、秋田犬だったり、ドーベルマンだったり、セントバーナードだったり」

な「うん」

ワ「次元世界を含めたら数万種類以上になるんじゃないか？」

死「その中の1匹を直死の魔眼で殺したとしよう。そしたら、犬という分類の動物が全部死ぬわけじゃないでしょ」

ワ「なるほどな。たしかに直死の魔眼でも殺せないわな」

死「それに、ワイズという1個人を殺すっていうのも無理。ワイズ『《混沌の賢者の石》』だから。それに直死で刺しても、世界の修正が入って元に戻っちゃう」

な「むずかしくてよくわからないの・・・」

ワ「ま、いずれわかる時が来るさね」

死「そんなこんなでココまでお送りしました。今回はココで終わります」

ワ「やっと終わったか」

な「むずかしくてわからないところもあったの」

死「難しいのは俺自身よく理解してるつもり。質問とかあったら随時受け付けてるので、いつでもどうぞ」

ワ「んじゃ、今回はなのはちゃんに締めてもらったか」

な「ふえ！？」

死「いいねそれ。お願いするよ」

な「え、え〜と・・・感想や応援をまってるの」

ワ「叱咤激励や批評も待ってるぜ」

な「では、また次回なの！」

死・ワ・な「次回も全力全開！」

ステータス情報（後書き）

死食経典義「今回は後書きなし」

ワイズ「いや、コレ自体が後書きだ」

無印編第四話（前書き）

死食經典義「毎度お久しぶりです。死食經典義で御座います。前の更新から彼は1ヶ月近く、更新遅れて、本当に申し訳ない!!」

ワイズ「読者も減ってるんじゃないの？」

死「うぐう・・・」

無印編第四話

みなさん、高町なのはです！

わたしが助けたフェレットさんがピンチになっていたとき、ワイズさんが助けに来てくれました

そして、フェレットさんから魔法の力をくれました。

平凡な小学3年生だったわたし、高町なのはの運命が変わった瞬間でした

黒い生物を撃退し、ジュエルシードという小さな青い宝石を封印したワイズ達は戦闘による破壊の跡が目立つ路地から一路公園に移動していた

夜の公園は人影もなく静寂に包まれていた

なのはとワイズは近くにあったベンチに座った

「えっと・・・大丈夫？」

一息ついたなのはの口から出たのは、そんな言葉だった

その声を掛けられた対象はというと・・・

「・・・きゆうっ・・・」

ワイズの手の中でぐったりとしていた

それもそうだろう。公園^{こうえん}に移動するまで、ずっとワイズに持たれていたのだ、尻尾の先で……………

ぐったりしてもなんら不思議はない

「さて、どーいった経緯でアレがここにあるのか話してもらおうか」

「それより自己紹介が先だと思うの」

「それもそーか。んで、小動物。てめーの名前はなんだ？偽名を使ってもわかつからな」

そんなワイズの迫力にビビりながらも、フェレットは自分の名前を言った

「ユ・・・ユーノ・スクライアです」

「高町なのはです！」

「ワイズ・カオストーンだ」

ワイズの名前を聞いたフェレット・・・もとい、ユーノは首を傾げながらワイズに訊ねた

「ワイズ・カオストーンって、歴史書の中に出てくる過去の人物の名前じゃ・・・？」

「過去も何も、それが俺の名前だ」

「はあ……」

ユーノは納得の言っていない返事をしてしまった

それもそうだろう。自分には偽名を言うなと言うのに、自分は過去に存在したと言われている人物の名前を言ったのだから

対するワイズはユーノの様子を気にした様子もなく、質問をぶつけた

「んで、なんで魔種青石ましゅせいせきがこんな場所であんだ？あれはきっちり遺跡ごと地中に埋めたはずなんだが？」

「魔種青石？随分昔の呼び方ですね？今はジュエルシードって言う名前ですよ。それに遺跡ごと埋めたってどういうことですか？」

ユーノは思わず聞き返してしまった

ジュエルシードは古い文献には魔種青石の名前で載っていたが、その内容からジュエルシードと改名された過去があった

今現在では、考古学者の間でも魔種青石の名前で呼ぶものは殆どおらず、知っているものすら一握りの忘れられかけている名前だ

「質問に質問で返すな、阿呆。俺の質問にちゃんと答えたら、てめーの質問に答えることを考えてやってもいいぜ」

「はあ……？えつとですね、僕が発掘作業の指揮をとって掘り出したんです。でも、発掘後の輸送中に原因不明の事故が起こってしまい、地球ちきうに落ちたんです。僕はジュエルシードを回収しようとしたんですが……」

「返り討ちにあって、なのはちゃんを巻き込んだ・・・と」

「お礼は必ずします！なので、どうか力を貸してください！！」

ユーノは小さな頭をワイズとなのはに向けて深く下げた

なのははどうしたものかと、ワイズに視線を向けた

そんななのはの頭に手を置き、撫でながらなのはを見て言った

「俺はなのはちゃん次第だ。なのはちゃんが手伝うつーなら、俺は喜んで手を貸してやる」

（そーじゃなくても手伝うくせに、素直じゃないね）

（うるせえ）

なのはは暫く考えていたが、意を決したのかユーノを目の高さまで持ち上げてこう伝えた

「どこまで力になれるかわからないけど・・・」

「っ！！ありがとうございます！！」

なのははユーノの願いを受け、ジュエルシードの探索封印の手伝いをすることに決めたようだ

そんななのはを満足そうに見ながら、ワイズはユーノに話しかけた

「んで、魔種青石・・・じゃない、ジュエルシードはいくつばら撒かれたんだ？21個全部とか言わねーよな？」

その質問にユーノは目を逸らした

「・・・おい」

「・・・21個全部です」

「・・・めでーなあ、おい・・・」

まあ、なのはちゃんが今回3個封印したから、残りは18個か・・・
魔種^{ジュエルシード}青石は発動しねーと場所の特定は難しいなあ・・・。
本来の目的の『アレ』はまだ目覚めてねーみてーだし、まあ、ぼちぼちやってるか

ワイズは手を数度叩いて「さ、今日はもう遅い。送ってくぞ。詳しい話しは明日でも大丈夫だろーしな」と提案した

反対意見はなく、その話し合いはここでお開きとなった

余談だが、夜に無断で出かけたなのはのことを恭也達が待っていて、事情の説明を面倒そうにワイズがしてたのも、夜遅いからとなのはが自分の部屋にワイズを泊めると言い出し、それに反対した恭也がなのはに「そんなお兄ちゃん嫌い！」と言われ大ダメージを受けたのも、あくまでも余談である

翌日、なのはは元気に学校に登校し、ユーノは一人なのはの部屋で

あることを考えていた

あのワイズって人、なのとは比べ物にならない魔力を持っていた・
・それにジュエルシードのことも何か知っていた感じだった

昨日のワイズとの短い会話の中に出てきて感じた、幾つかの疑問

自らの事をワイズ・カオストーンと名乗ったこと。ジュエルシードを今は使われることのない古い呼び名の魔種青石と呼んだ事。そして見たことの無い魔法を使っていたこと

ワイズ・カオストーンは古い文献に何度も出てくる有名な名前だ。新しいものだと時空管理局創設の時に名前が出てきたし、次元世界平定の時にも出てきてる。古いものだと古代ベルカの聖王家回顧録や複数の世界が崩壊した大規模次元震を綴った記録書。僕が知っている一番古いものだと始まりの国・アルハザードの歴史学者の日誌に出てたはずだ。アルハザードの記録書や古代ベルカ時代にいた人からジュエルシードのことを魔種青石と呼んでも不思議ではないんだけど・・・・

仕舞い込んでいた記憶を引きずり出したユーノはある可能性を思いついた

ワイズ・カオストーンは継承される名前なのかな？もしそうなら様々な時代に名前があるのも納得できる・・・・でも、確証がない。あの人は何か苦手だから、直接聞けないし・・・はあ・・・・

ワイズのことを推察したユーノだったが、前夜の出来事でワイズに苦手意識が出来てしまったようだ

そんな時、ユーノに念話が飛んできた

（おい、小動物。今、外に出れっか？）

（えっ！？あ、はい。出れます）

（なら、すぐに外に出て来い）

そう伝えたとワイズは念話を切ってしまった

ユーノは溜息を吐き、外に出て行った

ワイズと呼び出されたユーノは近くの公園に来ていた

ワイズは肩に乗せているユーノに話しかけた

「んで、呼び出した理由だけだよ」

その言葉にユーノはワイズの顔を見た

理由もなく呼び出したとしたら一言文句でも言おうかと考えていた
りしていた

「これから、魔法の練習やんだ。小動物から見ての感想や意見を聞
きてーと思ってな」

「はあ？それくらいなら別にいいけど？」

「うし。んじゃ結界張らないとなあ」

妙にワクワクした様子でワイズは結界を張った。人避け、防音等色々な結界を重ねがけし、どこからともなく幾つもの木偶人形を取り出して接地している

このとき、ユーノは見たことの無い魔法を見る機会が出来た、そしてそのことを聞くことが出来るかもと考えていた

だが………

「螺旋丸!!」

「擦れ飛んだ!?!?」

目の前で木偶人形が腹の部分から擦契られるのを見たり

「赤火砲!!」
しゃっかほう

「木が!?!木が燃えてるって!?!?」

火塊が命中した木が勢い良く燃えたり

「日輪」
にちりん
「天墜」
てんつい
「!?!」

「地面が熔けてる！?!?ってゆーか、暑い！?!?」

太陽光レーザーで熔ける地面の熱にやられたり

「^{グング}轟き渡る^{ナール}雷の神槍！！！！」

「雷の槍！?って、静電気で毛がああああっ!?!?」

雷の槍の影響でユーノの全身の毛が思いっきり逆立ってボサボサになったり

「影よ、あれ!!」

「影が犬に!!.....って、ぼくは餌じゃなあああああっ
い!?!?」

ワイズの影が変化した犬にユーノが追い回されたり

「次は.....蒼の軌跡!!」

「って、噴水壊しちゃ.....遅かった.....」

ユーノの制止の言葉が間に合わず、蒼い魔力衝撃が噴水を跡形もなく粉碎し水が間欠泉の如く噴き出したり

「次の目標は……あの木にするか。いくぜ!!」滅^{フラステイニング}びの咆^{ハウル}哮”!!!」

「口を開けて何を……って、声が衝撃波に……って、耳があああああああ!?!?!?」

ワイズの声が衝撃波になり、標的となった木を粉碎した。ワイズの肩にいたユーノはワイズの声の大きさに耳を塞いでいたが

「次でラストオ!!闇よりもなお暗き存在^{もの}、夜よりもなお深き存在、混沌の海よ、たゆたいし存在、金色なりし闇の王……」

「ちよっ!?!なにその物騒そうな呪文!?!それはやめてーーーーー
!!!!!!」

「え〜」

最後と言って唱えていた呪文を聞いたユーノが慌てて止めたりと、そんなことがあったりした

ワイズが一通り魔法を使い終わった公園は、あちらこちらに穴が開き、木々が倒れ抜かれ燃えていた

ユーノはその光景に口を大きく開けて絶句していた

1個1個の魔法の威力もそうだけど、アレだけの魔力を使ってなにもない顔をしてるこの人って……！！

「さて、帰るか」

黙りこくっているユーノを気にした様子もなく、ワイズはすっきりした表情でそう告げた

そんなワイズにユーノはあることを訊ねた

「えーと……この惨状はどうするつもり？」

「あ？ああ。忘れてた。直さないと駄目だよな」

そう言うと、ワイズは徐に右手を正面にかざした

かざした右手には金色に輝く魔力が集まっていて、その魔力が公園内の様々な破壊された場所へと飛んでいきその場所を包み込んだ

「発動、純潔。チエイステイティー 全てを有るべき姿に戻せ」

その言葉に反応し、金色の魔力が眩い光を放った

その眩しさにユーノは思わず目を瞑ってしまった

暫くすると光りが落ち着き、ユーノは目を開くことができた

その視界に映ったのは、ワイズが魔法を使う前と全く変わらない公

園の姿だった

「・・・・・・・・あれだけの破壊を一瞬で全部直すなんて・・・・・・・・」

「昨日も言っただろ。俺はワイズ・カオストーン。生きる伝説、不老不死の体現、混沌の賢人だ。昨日の今日で忘れたつーと、かなりボケが進行してんじゃないか？」

「ボケてません!!」

どちらかと言うと、ボケているのはワイズでユーノは突っ込みだ

公園内の修復を終えたワイズはもう用がないと公園の出口へと向かった

公園から出る直前、ユーノはもう一度公園へ振り向いた。だが、やはり先ほどの破壊の痕跡はなく、結界の解除で入って来た人が普通に歩いていた

この人は、本当にあのワイズ・カオストーンなのか・・・・？本当に不老不死・・・・・・・・？

ユーノはまた思考の海に潜ってしまった

そんなユーノをワイズはちらつと見るが、興味なさそうにユーノをなのはの家に届ける為、歩を進めたのだった

ステータス情報更新

チエイステイティ
純潔：ワイズが持つ七美德のうちの1つ。能力は下記の通り

チエイステイティ
純潔（外部開放時・???）

ありとあらゆる破壊痕や異常状態を初期状態に戻す能力
スキル

破壊された建造物や汚染地域を始めとして、精神汚染や洗脳など、個人レベルでの汚染にも対応出来るが、元の状態を把握していないと元に戻すことは出来ない

使用対象を1個人に限定すれば、対象者の悪意さえも昇華することが可能だが、対象者がその悪意を悪意と認識していなければ効果はない

ワイズが今回使用した漫画、小説の技について

実際にその技を使っているのではなく、魔力を使ってその技・魔法を再現している為、元の技・魔法とは酷似しているが別の魔法になる。

・螺旋丸はチャクラではなく、魔力を使っての再現発動。・赤火砲^{ほう}は魔力の炎熱変換での再現。・日輪^{にちりん}”天墜^{てんつい}”は結界魔法をレインズのように使った再現。・轟^{ゲンゲ}き渡る雷の神槍^{ナール}は雷撃変換での再現。・影よ、あれは魔力を使つての影の操作。・蒼の軌跡は魔力砲撃。・滅びの咆哮^{ブラステイング・ハウル}は声に魔力で破壊能力を付与し再現。最後の未使用で終わった闇よりもなお暗き存在^{もの}、夜よりもなお深き存在、混沌の海よ、たゆたいし存在、金色なりし闇の王・・・も魔力ワイズが持っている多数の能力で再現使用しようとしていた

上記の通り、元の技・魔法と酷似しているが、それとは別の魔法に分類される

無印編第四話（後書き）

死食經典義「てな訳で、第四話をお送りしました。アニメだと2話でなのはが学校に行っている時間帯の話です」

ワイズ「いやゝ、観客がいるときに使う魔法って気分いいわ!!」

死「すっきりした顔してるなあ」

ワイズ「おう! やっぱ観客いねーとな!」

死「さて、今回ワイズが使った魔法、わかる人いるでしょうか? 気が向いたら感想に書いてくれると嬉しいです。解答は次回の前書きでやりますが（笑）」

ワイズ「んじゃ、また次回会おうな」

死「でわでわ」

無印編第五話（前書き）

死食經典義「まずは前回ワイズが使った魔法なのの解答？を

螺旋丸（NARUTO）。赤火砲（BLEACH）。日輪天（PS

YREN）。轟き渡る雷の神槍ネキマ。影よ、あれ（伝説の勇者の伝説）。

残りは面倒になったので、各自でお調べくだs「死ね」ぐべらっ！
？」

ワイズ「駄目作者は俺が鉄槌を下しておいた」

無印編第五話

ワイズはユーノをなのは家に届けた後、一人近くの神社の石段に腰を下ろして、煙草を吹かしていた

「・・・なのはちゃんが学校から帰ってくるまで暇だな・・・」

「

もとい、暇を持て余していただけのようだ

（それなら、ゲームセンターでも行ったら？なのはちゃんにヌイグルミのプレゼントとか）

「今アソコは良いのがねえーんだよ。他のも全部ランキング制覇しちゃったしよ」

そう、ワイズは近場のゲームセンターの全てのゲームのランキングを総なめにしてしまっていた

そのゲームセンターを利用している人の中には、彼を神と崇めて教えを請う者までいるらしい

（・・・じゃあ、どうするのさ？）

「それを今考えてんだよ・・・ゲーセン以外でなんかねえーかね？」

（ジュエルシードを探すとかは？）

「・・・・・・・・・・・おい、アル。お前、俺がそーゆーの自分から

動くと思ってるのか？」

（だよねー）

さて、今ここにはワイズ一人しかいないのだが、ワイズは確かに誰かと話をしている

お気づきの方も既にいらっしやるだろうが、ワイズが会話をしている相手はワイズの中にくつろいでいるアル。そう、ワイズが混沌の賢者の石になってから初めて出会った人間。はじまりの王、アルハザード・レティシア・アルフォルス

彼女と出会い、彼女の国で自らを完成させたワイズははじまりの国の崩壊の際、アルの魂と魔力を吸収同化した。それ以来、彼女は長い付き合いになっている

アルは普段からワイズと感覚を共有しており、更に自分の魂も表面に出すことができるため、よくワイズとダベリングをしているのだ

何故、はじまりの国が崩壊したのか。何故ワイズはアルを吸収同化したのか。それらはまた別のお話となるので、またの機会に

「あゝ……なんかおもしれーこと起きねえーかな。例えば、魔種
青石の複数同時暴走とか」

（それこそ面倒……ん！？念話キャッチー！）

まあ、あながち間違いではないだろうが………何処からか苦

情が出そうな気もしないでもない

「んあ？」

（コレはなのはちゃんとユーノ君だね。どうする、割り込んでみる？）

「・・・そだな。小動物が何吹き込むかわかんねーし、聞いておくか」

ワイズはそう言いながら、煙草の火を消して携帯灰皿に吸殻を入れた
マナーはきちんと守りましょう！

+++++

聖祥大付属小のなのはのクラスでは、漢字の成り立ちについての授業をしている

なのはもその授業を聞き、ノートにとっている

が、それとはまた別にユーノと念話で会話をしていた

それでもちゃんと授業が頭に入っているのだから大したものだ

（ジュエルシードは僕らの世界の古代遺産なんだ）

（古代遺産って・・・昔の人の生活跡や残した道具だよね？）

（そう。本来は手にした者の願いを叶える魔法の石なんだけど、力の発言が不安定で、夕べみたいに単体で暴走して使用者を求めて周囲に危害を加える場合も有るし、たまたま見つけた人や動物が間違っ使用してしまつて、それを取り込んで暴走することもある）

（そんな危ないものが、どうしてうちのご近所に？）

そう、確かに危険だ。例えて言うなら、自分の家の下にいつ爆発するかわからない不発弾があるようなものかもしれない。ちよつとした衝撃で爆発する不発弾、変な例えかもしれないが・・・

しかも、地球には魔法文化はない。では何故ジュエルシードが海鳴にあるのか？

（・・・・・・僕のせいなんだ・・・・）

ユーノは、自分が遺跡発掘を生業にしていること。あるとき遺跡から21個のジュエルシードを発見したこと。それを輸送中に事故かなんらかの要因の人為的災害で地球に散らばってしまったことをなのは伝えた

（今まで見つけられたのは、まだ3つ・・・）

（あと18個かあ・・・）

そんな2人の念話^{かいわ}に、ワイズが割り込んできた

（横から失礼）

（あ、ワイズさん）

（いくつか小動物に言っておきてえーことがあってな）

（なんでしょうか？）

ワイズはそこで一旦溜めを作ってから、一息に一気に纏めて言い出した

（ジュエルシードは手にした者の願いを叶える魔法の石じゃなく手にした者が第三者の願いを叶えるもので元々がそういうものなのに無理に自分の願いを叶えようとするから力の発言が不安定になって暴走するんだっーのそれにちゃんとした処理を施したとこに保管しておかねえーから周囲の複数の生物の深層心理の願望を感じ取っちゃって単体で暴走すんだ使用者を求めて周囲に危害を加えるのは複数の自己願望を取り込んでるせーだし生物を取り込むのはその方が楽に移動とかができっからなんだっーか輸送途中に人為的災害にあったっーたがそもそもスクライアー族が掘り返さなきゃこんなことにはなってねーんじゃねーか俺はちゃんといろんなとこに掘り返すなーとか封印をとくなーとかそういう文章もちゃんと残しておいたはずなんだがまさか知らなかったなんっーこたーねえーよな？）

本当に纏めて一息で言いました。言うのはいいが、読点・句点がなくて読みにくい……

ワイズが言ったことに、ユーノは呆氣にとられた

（言われて見れば……古代文字で『封印とくべからず』って書いてあったような……）

黙ってしまったユーノに気を使ったのか、なのはが念話を再開した

（あれ？ちょっと待って。ジュエルシードが散らばっちゃったのって、全然ユーノ君のせいじゃないんじゃない？）

（でも、あれを見つけたのは僕だ。全部集めてあるべき場所に戻さない・・・）

（そんでもって、いざやってみたら見事に振り返り討ちっ）

（もうワイズさん！ちやかさないでなの！）

（へーい）

まあ、今ワイズは暇だから、ユーノを弄ったのだろう

なのはに言われて弄ることはなくなったが、時折冗談を言うことは止めなかったワイズだった

学校が終わり、すずか、アリサと別れたなのは1人、家に向かっていた

（そろそろ家に着くよ。取り合えず、一緒におやつ食べようか。今日のおやつはなにかな）

そんな時、なのはは何かを感じ取った

その感じ取った何かは、タベジュエルシードが発動したときに感じたものと同じだった

（ユーノ君、これって！）

（うん。新しいジュエルシードが発動した。すぐ近く！）

（どうすれば！？）

（一緒に向かおう。手伝って！）

「うん」

なのははその場から走り出し、ジュエルシードが発動した場所へと向かった

ジュエルシードが発動したのはワイズも感じ取っており、「えゝゝゝ・」という顔で後ろの神社を見上げた

（ワイズさん！ジュエルシードが！）

見上げたのとほぼ同時になのはから念話が届いた

（ああ、俺もちゃんとは発動は感じた、つーか発動した神社のすぐ下にいるんだわ）

（本当！？）

（ワイズさん！僕達が付くまで足止めをお願いしますませんか！）

そう、ジュエルシードが発動したのは、ワイズが座り込んでいた石段の上にある神社の境内

先ほどワイズが見上げたのは、「何で俺のすぐ側で発動すんだよ」
ってことで見上げたのだ

（はぁ・・・了解。俺じゃまともな封印はできねー。マジで足止めしかできねーから、なのはちゃんの早い到着を待ってるぜえ〜い）

（はいなの！）

念話を終えたワイズは石段を登り、境内へと入った

そこには若い女性が倒れていて、さらにその奥には4ツ目で体のあちこちに青い珠がある大きな黒い犬のような生物がいた

「・・・・・・・・犬でも取り込んだか？」

その呟きに反応したのか、黒い犬はワイズに飛び掛った

「グオオオオ！！」

ワイズは慌てる様子もなく軽々と避け、ついでとばかりに前足を取って投げ飛ばした

黒い犬はすぐに体勢を直し、ワイズを睨み付けた

だが、ワイズは何処吹く風とばかりに新しい煙草に火をつけた

「めんでえーなあ・・・どーやって足止めすつかねえ」

（バインドとかで動き封じちゃったら？）

「それだと芸がねえーだろ？折角のイベントなんだしょ」

（なら、嫉妬で何かになつたら？）
エンヴィー

アルの発言に、ワイズはパチンと指を鳴らした

「いいな、それ。んじゃ、何になるかだな。何がいいかな〜つと」
アルと会話しているワイズだが、その会話をしている間に何度も黒い犬が飛び掛って来ていたが、その度に始めと同じように投げ飛ばしていた

数回投げられた黒い犬は、ワイズをどう倒すか考えているのか、その場で唸りをあげて睨み付けている

「よっしゃ！熊にしよう！最近でかい熊の魂も吸収したことだしな」

（熊・・・ああ、あれね。でも、なのはちゃん達が到着したらビツクリしないかな？）

「そんなんは後で考えればいいって。そんじゃま、行きますかあつ」

そう言ったワイズの体からは魔力が噴き出し、陽炎の如く揺らめいていた

そして右手で自分の顔を覆い、叫んだ

「エンヴァー嫉妬発動！変っ！身！」

（今よ、開けくまー オープンワイズ）

・・・・色々と突っ込みたいが、突っ込んだところで聞く耳は持たないだろうし、何より突っ込みを入られる者がいいここにいない

叫んだワイズを噴き出していた魔力が包み込み、白い輝きを放った

その光りに黒い犬は眩しそうに目を細めた

その光りが収まると、その場にはワイズではない、巨大な生き物が立っていた

その生き物は熊だと言うことはわかる

だが、その熊は普通の熊を違い全体の毛が翠色、頭頂部から臀部にかけて鱗で出来たような甲殻で覆われている。肘から下も棘の付いている手甲のような甲殻が付いており、手に生えている爪も普通の熊よりも長く鋭い

青い熊の獣。そう、わかる人はもうわかっただろうが、青熊獣・アオアシラだ

エンヴァー嫉妬の能力を使うためには、変化する対象の魂が必要になるのだが、一体どこでゲームにでてくるモンスターの魂なぞを手に入れたのだろうか？

「グルウウウ・・・ウオオオオオオオオオン！！」

姿の変わったワイズに向け、黒い犬は威嚇の雄叫びを上げる

「ウウウウ・・・グガアアアアアアアッ！！」

それに応えるかのように、ワイズもまた雄叫びを上げた

そして、同時に目の前の敵へ向けて飛び出した

++
++

ワイズに遅れること数分。なのはとユーノが神社の境内に到着した

そこでののは達が見たものは・・・

「く・・・くま？」

境内の中心に我が物顔でドカツと座り込んでいる熊だった

ジュエルシードが発動したのは間違いなくこの境内。そしてここに見慣れない熊がいる

ユーノはこの熊がジュエルシードが現住生物を取り込んで実体化したものでないかと推測を立てた

「・・・ワイズさんは何処なの？」

対しなのははここにいるはずのワイズの姿を探し、辺りを見回していた

そんななのはとユーノはふと視線を感じ、熊を見た。そしてぱつちりと熊と目が合った

「ユユユ、ユーノ君！熊さんと目が合っちゃった！？」

「ととと、取り合えず！あの熊からジュエルシードの反応があるから、封印しないと！！」

視線が合ったことで動揺している2人に、熊は・・・

「ガウツ」

右前足で自分が座っている場所を指・・・いや、爪で差した

その場所をよく見てみると、熊は何かの上に座り込んでいたのがわかった

なのは達は体をずらし、見る角度を変えた。そうしたら、その何かが黒い犬のような生物だということに気がつけた

椅子代わりにされている黒い犬は正しくボロボロといった姿で、気絶しているのか動く気配が全くない

なのは達が黒い犬を確認したからか、熊は立ち上がりなのは達の方へ歩き出した

「・・・っ!？」

向かってくる熊にユーノは警戒した。だが、その警戒はすぐに解く事になる

熊は歩きながら左前足^{ひだりて}を顔に持つていく

すると熊の体が光り、その輪郭が変化し、光が収まった頃にはワイズ^ズの姿になっていた

「^{ヘンサイ}嫉妬解除つと」

「・・・・・・・・」

なのはとユーノは言葉も出ないのか、唯々ワイズを見ているだけだった

そんな2人にワイズは、声をかけた

「足止めはしといたぜ。封印、よろ」

「・・・・・・・・あ、はい。なのは、レイジングハートを」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、うん。レイジングハート、お願い」

「All right・Stand by Ready・Set
up」

再起動を果たしたなのははレイジングハートを起動させ、バリアジヤケットを身に纏い、レイジングハートを黒い犬に向けた

「ジュエルシード、封印」

「Sealing」

「ゴガアッ!!」

ジュエルシードを封印しようとした時、黒い犬が突如起き上がり鳥居の上に飛び乗った

そしてこの場所から逃げようとする本能が生み出したのだろう、1対の翼を背中に作り出し空へと飛び上がった。

「逃げるつもりだ！追いかけないと!!」

「レイジングハート、昨日の空を飛んだの。出来る？」

「Yes・Flyer・fin」

なのはの願いを聞いたレイジングハートは、昨晚飛行のために使用した魔法・フライヤーフィンを発動させた

それによりなのはは黒い犬を追って空へと上がるが、黒い犬は既にかなり遠くまで移動してしまっていた

移動先には森と山しかなかったのは幸いだろう。もし街の方に向けて飛んでいってしまったら、一般人に目撃されたかもしれない

なのはは黒い犬を追いかけるが、その距離はなかなか縮まらない

「・・・このままじゃ、追いつけない。レイジングハート、もっとスピード出せないかな？」

「All right・Flyer fin boost up」

レイジングハートが行ったのはフライヤーフィンのブースト。このブーストでなのはの背中についていた羽のアクセサリーが巨大化し、天使の翼のように広がった

「うわあ、すごい・・・」

「Ready go」（いきます）

「うん・・・きゃあああああ!？」

この翼、フライヤーフィンの加速性能を上げるために出したものが、その加速度合いは先ほどの倍以上となっていた

例えば、時速20kmで走行していたときにいきなり40kmまで加速したと考えるといいかもしれない

人間、急な加速には慣れないものである

だが、その急激な加速のお陰で黒い犬に追いつき、追い越すことが出来た

「って、追い越しちゃ駄目なの!」

そっつい、なのはは急制動をかけた

だが既に黒い犬を100メートルくらい追い越していたうえに、その黒い犬もUターンして再度逃げようとしていた

「レイジングハート！この距離で封印できる方法、何かない？」

「Is that's for you desire」（あなたが、それを望むなら）

レイジングハートの言葉になのはは空中で止まった

すると、なのはは胸の奥でリンカーコアが鼓動するのを感じ、レイジングハートはなのはの足元に魔方陣を展開した

「That's right. Focus your internal spiritual heat to your arms」（そうです。胸の奥の熱い塊を、両腕に集めて）

なのはは言われたとおり、両腕に魔力を集める。そして、前方にいる黒い犬へとレイジングハートを構えた

「Mode change・Cannon Mode」

なのはの魔力を受け取ったレイジングハートがその形態を変形させる

前方に魔力を集中させるためにヘッドが金色を基調とした音叉状の形態になりそれを白いカバーが覆い、ブームが伸びる。そしてピンク色の光の羽根が広がり、トリガーユニットが現れる

なのはがトリガーユニットを握ると、音叉の中心にライフルの銃身のような砲身が現れた

その様子は境内にいたワイズ達にも見えており、ユーノはポツリと呟いた

「まさか、封印砲？なのはは砲撃型・・・」

砲撃型の魔導師はその数が少ない。その数少ない砲撃型が魔法文化のない地球で見つかったことにユーノは驚いていた

それに対しワイズは、自身の中にいるアルにこんなことを聞いていた

背中 of 翼に合わせんなら、バスターライフルの方がいいと思わねえか？

（それも両手持ちだったら、完璧だね）

ワイズのそんな場違いな考えにワイズの中で賛同するアル

お前ら、手伝おうとは思わないのかと突っ込みをいれたい

「Shoot in Buster Mode・Immediate fire when target is locked」
『直射砲』形態で発射します。ロックオンの瞬間にトリガーを」

なのはには逃げる黒い犬をマーカーが追いかけている映像が見えていた

そのマーカーが黒い犬を捉えた瞬間、なのははトリガーを引いた

発射の衝撃でなのははバランスを崩し、魔方陣へと倒れこんだ

その叫びに応える者はこの場所に・・・・・・・・・・
存在した

彼は、元々いた場所に大きな砂埃を巻き上げ、子犬へと一直線に飛んだ

そして、子犬に衝撃が伝わらないように優しく受け止めると、その子犬を抱いたままなのは元へと飛んだ

「お疲れ様、なのはちゃん。わんこも無事だ、頑張ったな」

なのはに労いの言葉をワイズは微笑を浮かべながら言った

その笑顔を見たなのはも笑顔でワイズに答えた

「ありがとうなの！」

そんななのは手の震えは、いつの間にか止まっていた

「Internalize No.16」

境内に戻ったなのはとワイズは、レイジングハートヘジュエルシードを収納した

「コレで4つ目・・・」

「封印したのは16、18、20、21か。残りは17個一つことだな。一体何処にあるやら」

を思い出していた

だが、そんなことをしている間に今いる場所から逃げるべきだったと、ユーノは後悔した

「レッツゴー！」

「ちよっ！？うわあああああああああ……」

ベクトルを操作したワイズが思いっきり地面を蹴り、その際起きた衝撃波でユーノは吹き飛んだ

さらに不幸なことに吹き飛んだ先に何故か石があり、それに頭をぶつけてしまったユーノであった

そしてワイズ達はユーノがいないことに気がついたのは、高町家で夕食を取っているときだったとさ

ステータス情報が更新されました

嫉妬・エンヴィー（外部開放時・???）

自身の外見を变化させる能力^{スキル}。

变化した人物や生物の能力を使うことが出来るが、変化する対象の魂が自分の中になければ変化できない

ワイズが変化対象者の魂を保持している場合、その魂を表に浮上させることで、その人物そのものになることが可能

なのはの父・士郎を治療した時、アルの外見になったうえでアルの魂を浮上させて治療を行っている

魂がなければ、その対象になれないはずなのだが、当話でワイズはアオアシラに変化している

一体何処でどうやって、アオアシラの魂を取り込んだのやら・・・

傲慢・プライド（外部開放時・???）

世界にイメージを投射し、顕現させる能力。明確なイメージが出来なければ顕現させることは出来ない

ワイズが使う漫画や小説の魔法、武器の殆どはコレで作りに出していることが多い

生命体の投射は肉体に限り可能（所謂、魂のない肉の塊）。その肉体にワイズの内に眠っている他者の魂を入れることで、一時的な蘇生は可能

この能力で生み出したものは、ワイズの意味で消去可能

この世の全ては自分の所有物だと言ったのは某英雄王。対しこの世全てのモノは自分が生み出すといったのはワイズ

どちらも傲慢といっても過言ではないと思うのは作者だけだろうか？

なのはとレイジングハートの使用した魔法とカノンモードについて

フライヤーフィンのブースト、これはそのまんまブーストさせただけです

アクセルフィンやフラッシュムーブがあるのではという声もあるでしょうが、アクセルフィンはA・sでの登場なので使用不可。フラ

ツシムームはフェイトのブリツアクションに対抗して編み出したもので、今作のなのはまだフェイトと出会ってないので使用不可という訳で、単純にブーストをさせました。ブースト時の天使の翼は、まあ始めからこうするつもりで背中にアクセサリーとして付けさせてた訳です、ハイ

カノンモードについて

劇場版のカノンモードとほぼ同じですが、音叉状の先端の間に砲身が追加されております

カノンと聞いたなのはイメージが反映された形になっております

この砲身は無駄ではなく、撃った砲撃の速度を向上させる能力が付随しているが、当の本人はそんなことは全く気がついてないという状況

のちのち気がつく……………かもしれないし、気が付かないままかもしれない

無印編第五話（後書き）

死食經典義「痛いジャマイカ!!」

ワイズ「痛いですんでるてめえが怖えわ!!」

死「遠距離ドライブで疲れてるからだに鞭撃って更新を頑張ったんだから、もつといたわれ!!」

ワイズ「今週中にもう1回更新したらいたわってやる!!」

死「……………ごめんなさい」

ワイズ「……………謝られてもこまるんだが……………」

なのは「と、取り合えず、感想とか待ってますなの」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1840/>

魔法少女リリカルなのは - 混沌の賢人 -

2011年4月14日13時32分発行